

1.psd

(空白)

3.psd

4.psd

5.psd

Track.7 The First Noel

協会・パリ支部。

「ん? これは……」

アンダーソン・カイルは思わず疑念を示した。

彼が手にしている資料は、先日日本で起こった急進派の襲来を受けての、事後処理を伴う資料だ。金色の魔女の助けもあり甚大な被害には及ばなかつたものの、人々が日常生活を過ぐすには些か不信感を抱かせる惨状になつてしまつた。それ故、要は被害に対する偽証とでも言うのか、人々がそれなりに十分な納得ができるようにしなければいけないのである。

「ふう……」

アンダーソンは午前中からずっと細かな字と向き合っていた。そろそろ身体の限界が来たのだろう、彼は手元の資料を「とりあえず置いておく用」と称した後ろのスペースへと置いた。既に部屋中にはたくさんの資料が床を埋め尽くしており、どこまでが必要なものでどこまでが不要なものなのか、彼以外には認識できない散らかり様である。

アンダーソンは目頭を押さえると、次の資料を手に取った。

「……これもetcの文書についてか」

事後処理及び事後報告とも言える資料。そのほとんどがetcの文書——鈴木聰太に関する内容だ。

「存在するという確証がないにも関わらず……よくここまでやれるもんだ」

アンダーソンは再び大きなため息を零すと、凝り固まつた身体を解すように大きく伸びをした。その瞬間だった。扉を小さく叩く音がした。

「どうぞ」

律儀に彼の返事を聞き終えてから、扉を開ける女性。先日、彼の秘書を務める事になつたマーガレットだ。

「……何度言えばいいのでしょうか。片づけるという言葉をご存知ではないのですか」
淡々と、呆れを通り越した苦言。アンダーソンは慣れているのか、何てことない調子で応対した。

「片づけようとは思っているよ。けど、片付けたら片付けたでどこにしまったか忘れてし
まうんだ」

マーガレットは何も言わずに彼を見つめた。おそらくその瞳には何の感情も抱いていない
のだろう。

「それで？ 何かあつたのか？」

無言の圧力から逃れるようにアンダーソンは彼女へ問い合わせた。

「呼び出します」

「……なるほど」

「つい先日も呼び出しを頂いていた様ですが、何か問題でも起こしたのですか？」

「いいや。そもそも俺が何かやらかしていたら、既にここに席はないさ」

そう返事をすると、アンダーソンはやれやれと言つた様子で立ちあがつた。そして再び大きく身体をのけ反るとゆつくりと扉の方へ向かう。ふと、彼はマーガレットとすれ違ひ様、その小さな肩に手を置いた。

「俺の机の掃除、頼んだよ」

そう言つてアンダーソンは、上役が待つ会議室へと足を進めたのだ。

アンダーソンが会議室に入ると、そこには以前と変わりない顔ぶれの男たち。そして大きなモニターがあつた。彼が所定の位置につくや否や、モニター上の男は静かに口を開き、

『金色の魔女の家にいる改造人間をここに連れてこい』

「え？」

アンダーソンは思わず聞き返すが、返つてくる声はない。どうやら彼の聞き間違いではなさそうだ。

「えつと……何故でしようか」

『当然の疑問だ。この問い合わせに関しては上層部も既に用意はしていたのだろう。寸分の間もなく、男はその答えを述べた。』

『研究所の中で最も危険な研究は何か。それは人間と同じ生命体を作りだすことだ。彼らは倫理を無視して改造人間を作りだした。その改造人間が研究所という組織から離脱したという噂を先日耳にした』

『……質問の答えにはなっていません。俺はその改造人間を連れてくる理由を尋ねたのですが』

『これ以上、君に話すことはない』

再び口を閉ざした男に対し、アンダーソンはやや苛立たし気に話を進めた。

「その改造人間を連れて来たとして、金色の魔女が黙つていないと 思いますが」

『マエストロがどう動くは分からぬ。だが、彼女は先日の日本支部での一件でこちらに貸しができてる』

「……つまり先日の件の謝礼を要求するということですか」

『好きに捉えて構わん。用件はそれだけだ』

「……はい。お疲れさまでした』

ぎこちない動作でモニターに向かい、頭を下げるアンダーソン。会議は終わったようだ。

『そういえば』

ふと、男の口が開いた。その声にアンダーソンは思わず顔を上げる。

『君のお父上はご健在かな』

「……ええ、おかげさまで』

『そつか』

その言葉を最後に、ふつとモニターの電源が落ちた。後に映るのは真っ黒な画面だけだ。傍に控えていたパリ支部の連中も続々と部屋を後にしていく。

アンダーソンは彼らが全ていなくなると、一番最後に会議室を後にしてた。そして真っすぐと先ほどの自室へ足を向ける。

「お、随分と綺麗になつたな」

アンダーソンが自室に戻ると、そこは彼が出て行く前と同じ部屋だとは思えないほど見違えていた。

「……もう散らかさないでくださいね」

秘書の小言をさらりと交わし、アンダーソンは彼女へと振り返った。

「そつちの結果は？」

彼女は迷うことなく、上着のポケットから小さな機械を取り出した。盗聴器だ。

「無事に終えました」

「そうか、ありがとな」

そう言つてアンダーソンは彼女の掌からそれを受け取つた。

「今後、こういう事は控えさせていただきます。バレたら私も只じや済まないので」

言いながら彼女はもう片方のポケットから小さな紙を取り出した。それはアンダーソンがこの部屋を後にした後、彼女が机の上で見つけたものであり、そこには「盗聴してほしい」との一文が書かれていた。

マーガレットは、近くのライターを手に取ると慣れた手つきで、その紙きれを燃やす。後に残るのは、灰皿の上の炭だけだ。

「さてと。せっかく君が机の上を綺麗にしてくれたようだけど、俺はそこに座れないね」

秘書が訝しげに眉を潜めると、アンダーソンは惜しむように机にそつと手を置いた。

「お出かけですか？」

「ああ、日本までね」

「……そうですか。それでは当分、この部屋を使用する方はいらっしゃいませんね」

マーガレットはざつと室内を見回して呟いた。そんな彼女の傍でアンダーソンは身支度を整え、馴染みのソフト帽をかぶつた。

「それじや。お土産、楽しみにしていていいよ」

「お気をつけて」

堅苦しく頭を下げる彼女を横目に、アンダーソンはそつと自室を後にする。

アンダーソン・カイル、海外出張のはじまりだ。

鳴り響くアナウンスにガタガタと重たい音を立てて歩く人々。

「……やかましいな」

空港内に響く雑音にやや顔を顰めるも、彼はそこまでその雑音を気にしてはいなかつた。それ以上の問題が、彼の心中には漂つている。

今回与えられた仕事に対する協会の思惑だ。更に、改造人間と雖も彼らには感情というものが宿つていて。その子供を無理やり連れてくる事が果たして自分に出来るのだろうか。彼女の行く末はきっと、人体実験しか待つていらないだろう。

「——それでも俺は、」

気の進まない仕事にアンダーソンは深いため息を零した。

「いや、まだ考える時間はある」

「ねえねえ、なにしてるの？」

「あつちであそぼう」

舌つ足らずな声が飛び交う室内。数人の園児の中心には一際背が高い少女が仮面で佇んでいた。

「ねえねえ」

「……うるさい」

「あそぼーよ」

「うるさい〔私に話しかけるな〕」

怒号をあげる少女。しかし園児たちはそれに怯むことなく、なおも金髪であり外国人であり、明らかに彼らにとつて異質であるその少女に声をかけ続けていた。

17.psd

「あそぼーよ」

「きいろー」

外見から付けられた安直なあだ名に少女——ノエルは一気に顔を赤らめた。

「……その呼び方やめるニ」

「いいじやん、きいろー」

「きいろ、きいろ」

ノエルが注意すると、それに反応するように他の園児達も「きいろ」というあだ名を連呼し始めた。そう、彼女の反応はまさに理想的だ。何を言われても無視をすればいいものを、ご丁寧に彼女は一つ一つ受けとめて反応していく。まさにからかいやすい対象そのものだつた。

しばらくの間、小規模な小競り合いを見届けると、天城紫乃はやつとこの幼稚園の先生らしく彼らの間に割つて入つていった。

「ほらほら、みんな。まだお昼休みじゃないわよ」

彼女の言う通り、今は授業中であつた。ピアノを用いたダンスを行う時間であり、モデルとしてノエルは園児たちの前に出ていたのだ。しかし彼女はすぐに嘲笑の的になつたのだが。

「はい、じやあもう一回。ノエルに合わせてね」

そう言うと、天城は再びピアノに向き直つた。そして軽やかに腱盤の上で指を躍らせる。室内に心地よいメロディーが響き渡つた。それに合わせて園児たちも身体を動かす。平和そのものの光景だつた。

二、三回ほど曲が流れた頃だらうか、遠くの方で小学校のチャイムが聞こえた。昼のチャイムだ。天城の幼稚園もこのチャイムを昼休みの合図としていた。そのため、園児たちはこの音が聞こえる否やすぐに授業が終了したと決め、あちらこちらへと視線を向ける。天城はやれやれと言つた様子でピアノを弾いていた手を止めた。

「はーい。じやあお昼休みにします」

先生の許しも得たということで、園児たちも次々と散つていき、各自好きに話し始める。あつという間に室内は園児たちの話し声で埋まつていた。ノエルもやつと自身の仕事を終え、深いため息をつく。しかし、その安らぎは一瞬で過ぎ去つていつた。

「きいろー」

「なんで髪の毛そんなに『きいろ』なんだよ」

園児たちの興味は依然として彼女に向いていた。

「せんせい、なんでリズム先生は髪の毛、『きいろ』なの？」

「リ、リズム……?」

「ふむ。それはね、外国人だからだよ」

天城はノエルの当惑もそつちのけで優しく園児に答える。

「外国人」

「日本語わかるんだ、すげー」

「リズム先生、何か日本語はなして」

先ほど以上に目を輝かして群がつてくる園児たち。ノエルは徐々に顔を赤らめながら、彼らに追い詰められていく。

「リズム先生！」

「何かしやべつてよ」

「う……うるさいつつ三」

ノエルは恥かしがるように、天城の背後へと逃げ込んだ。そんな様子を見て天城も、そろそろ昼飯の準備に取り掛かるよう園児に促す。

「当番の人、前に出てきて挨拶おねがいしまーす。えつと……今日は恵梨香と杏子と直人と……」

「……孝太郎と祐介」

天城が言葉に詰まっていると、すかさずノエルが小さく助言した。

「あら、覚えてたの」

「そここのホワイトボードに描いてある」

「そりいえば、そりだつたわね」

惚けたように笑う天城。

そんな彼女を置いて、ノエルは教務室へと向かつた。自身の昼飯を確保するためだ。

「……何で私がこんなことを」

ぶつぶつと文句を呟きながら、冷蔵庫を漁つていると後ろからずいっと手が伸びてきた。

「それは君が学校に行つていなからよ」

彼女が振り向くと、天城は馴染みの炭酸飲料を手に立つていた。

「学校に行つていないのは別に関係ないだろう」

「あります。あなたは居候だし、学校も行かずに暇してそعدだから。なら居候として家主の仕事を手伝うのは道理でしょ？」

「うう……」

非の打ちどころもないド正論にノエルは何も言い返す事が出来なかつた。

「あー、お腹空いた」

職員室。天城は身体をよろめかせながら、園長として決められた席に腰を落とした。

「あら、園長先生。お昼はまだなんですか？」

「何食べようか、考え中で」

「それじゃあ、ノエルちゃんもまだ食べてないんですか？」

天城の斜め前の席に座る宮下は、心配そうな聲音で首を傾げた。

「そうだけど……まあ、お腹空いてたら自分で何か食べるだろうから大丈夫、大丈夫

「そりだといいですけど」

宮下はなおも不安げな様子で天城の方を見る。すると、唐突に職員室の扉が開いた。

「あら、園長先生。何ですか、その姿勢は」

入ってきたのは丸山だ。彼女は天城が机にだらりと座っているのを見て、眉間のしわを一気に寄せた。

「ん?なんだ、丸山先生か」

「何だじやありません。そのような態度、園児たちが見たら教育に悪いです。それとその口調ももう少し正してください」

「はいはい」

まるで小姑のように小言を言う彼女を、天城はいつも通りの調子で聞き流す。彼女も彼女で天城のこのような態度には慣れたのだろう。丸山は自身の席へと向かつた。

すると、今まで会話を終わるのを待っていたのか、宮下の隣に座る松村がぐいっと顔を前に出してきた。

「あの、前から聞きたかったんですけど。園長先生とノエルちゃんってどういう関係なん

ですか？」

好奇心旺盛な彼女はきらきらと輝いたような瞳で天城へと問いかけた。その質問に天城は、少し考えるような仕草を見せると、

「そうね……何て言えばいいのかしら。保護者は保護者だけど……遠い遠い親戚みたいな感じかしら？」

「……それはもう他人なのでは」

松村の冷静な突っ込みを笑顔で流すと、天城は大きく伸びをした。

「さてと。お昼ごはん、食べてくるかー」

——ピンポン。

それは急な来客だった。玄関に近い丸山が応対に出ると、そこには大柄の外国人男性が立っていた。

「え、えっと……は、はるー？」

彼女は突然の外国人の訪問に戸惑い、まともな英語が出てこなかつた。そんな彼女の応対を外国人の男は人当たりのよい笑顔で受け取ると、流暢な日本語を口にした。

「園長先生はいらっしゃいますか？」

「え、園長ですか？　はい、私は少々おまちください」

慌ただしい足取りで奥に引っ込む丸山。しばらくして、教務室からカツプ麺片手に園長が顔を出した。

「つたく、こつちはまだ食事中だつていうのに……大体、来客の予定は……」

「こんにちは、マエストロ」

天城は男の顔を見た瞬間、露骨に嫌な表情を浮かべた。

「まあまあ、そんな顔しないでください。私もここまで来るのに苦労したんですから」

「何か用？」

「協会の特使として。金色の魔女にお伝えする事があります」

「そう……それじゃあ、応接室で話を聞くわ」

天城は真剣な声音でそう告げた。そしてすぐに背を向けて彼を案内する。協会からの特使——アンダーソン・カイルも静かにその後をついていった。

応接室。天城とアンダーソンは何も言わずに向き合っていた。彼らのほかには誰もいない。

「ええと……他のみんなは元気ですか？」

いきなり例の話題について話すのは気が進まなかつた。アンダーソンは申し訳程度の世間

話をしてからと思つたが、魔女の気はそこまで長くないようだ。

「アンダーソン・カイルくん。君はそんな話をするために来たわけではないでしょ？用件を手短に話して」

アンダーソンは彼女の言葉に対し、思わず押し黙ってしまった。事実、彼の内心の整理は未だ終わっていなかつたのだ。

「あなたほどの人が来るつてことは、それなりに大事な件なんでしょう？さつさと話してちようだい」

天城に促され、ついにアンダーソンも決心した。そして、言葉を選ぶようにしてゆつくりと口を開く。

「……改造人間についてです」

「へえ」

「……協会からこちらにいる改造人間を連れて來いという命を受けました」

「なるほどね」

そういうと天城は立ちあがり、別の部屋へと向かつた。数分足らずで彼女は再び応接室に戻ってきたが、その手には数枚の書類が握られている。

「既に公文書は来てるわ。あとメールでも」

「え……」

アンダーソンはその件については初耳だつた。

「あなたが来る前にそういう宣告は受けていた。改造人間を連れてこいつてね。先日のロベルトの件の貸しを返せつて。まあ、私が逆の立場でも何かしら要求はするわね」

天城は書類をひらひらとさせながら、何てことないようになに話していた。その様子を見て、アンダーソンは慎重に口を開く。

「……どうなさるおつもりですか？」

「どうするもなにも……別に？」

「いや、ですが……」ここで協会の要求を断ると今後の関係性にも影響が出るかと。研究所の勢力が弱い中、協会が勢いを増していくとなると、あなた自身の立場も悪くなるのでは。

それならば——

「それならば？その続きを？」

天城の視線に思わず、アンダーソンは口を閉ざしてしまった。そして勢いの削がれた彼は首を落としたまま、再び口を開く。

「……その、改造人間を見てみたいのですが」

天城は一瞬驚いた顔をしたが、二つ返事で彼女はそれを受け入れた。そして、廊下に向かつて改造人間の少女の名前を呼んだ。少女はすぐに顔を出した。口元にはつい先ほどまで食事をしていたのだろうか、茶色いソースがついている。そんな子供らしい、あまりにも人間の子供らしいその風貌にアンダーソンは戸惑いを隠せなかつた。

「ほら、ノエル。挨拶して」

天城に促され、ノエルは小さくお辞儀をすると、さつと彼女の背中に隠れてしまつた。

「何だ、お前。人見知りしてゐるのか」

「だ、誰が……してない」

顔を真っ赤にして怒る少女。アンダーソンには、やはり普通の子供にしか見えなかつた。

「……協会は、このような子を……」

消え入るような声で呟くアンダーソン。天城はそれを聞き逃すことはなかつた。

「あら、全部承知でここに来たんじやなかつたの」

「いや……そうだが、こんなだとは」

ずっと視線を落としている彼をノエルは天城の体越しに見ていた。すると数分の後、やつとアンダーソンがきつく拳を握りしめ、決意めいた顔を上げた。

「……協会が改造人間を連れてこいといった指示には、研究所の力を利用し、より多くの研究を進めて行くためです」

「たとえば？」

「……現状を維持するための力を」

「他には？」

「……それは……詳しく述べ……」

無言で見つめ合うアンダーソンと天城。その間の空気は決して穏やかではなさそうである。ノエルはその空気に当惑しながらも、今の彼らの会話の中で気になる言葉があつた。

「いま……改造人間って言つた？ 連れてこいつてどういうこと」

「このおじさんが、あなたを協会に連れてこいつて指示を受けたんだって」

平然と言つてのける天城。だが、ノエルの顔は一気に色を失つていった。そして彼女は天城の服をぎゅっと握りしめ、恐怖の入り混じった目でアンダーソンを見据える。

顔を上げずとも、アンダーソンには彼女の視線が自分に注がれているのがわかつた。もちろんその目に嬉々とした色はないだろう。

「さてと。アンダーソン・カイルくん。どうするつもりかしら。この子を協会に連れて帰つて、彼らの現状を維持するための力とやらに手を貸す？ そうすれば、もちろん君の地位も少なからず上がるだろうね。けれど、君が感じているようにノエルは既に一人の人間と相違ない」

天城とノエルの視線はずつとアンダーソンに向かっている。彼は何も言わずにただ床を

見ていた。どのくらいの間、彼は黙り込んでいただろか。いい加減、天城もしびれを切らしてきた頃だつた。突然、彼は顔を上げるとノエルを一瞥し、天城へと向き直つた。

「少女を隠します。いえ、隠すというより……私は今回の協会の命には従えません」

「そう……けど、もつと具体的に述べてほしいわ」

「ひとつ。当てがあります。ここから西へ……あまり人が立ち入ることのない山の中腹にある邸宅です」

「人払いされた邸宅……なるほど、ジエームズ・カイルの家か。確かにそこなら……」

天城もはたとした顔でアンダーソンを見た。彼も頷き返す。

「はい、当面は大丈夫だと思います。彼は元協会の元老の一人。私の父でもあります」

「こんにちは」

俺は礼儀正しくきちんと挨拶をして、馴染みの扉を開けた。だが開けてすぐ、俺は玄関の前で立ち止まってしまった。何だか慌ただしげに魔女が廊下を行き来していたのだ。

「何してるんですか——つてここ、ノエルの部屋じやないんですか？」

ほぼもぬけの殻となつた一室ではノエルが黙々と出かける準備をしていた。

「どこか行くんですか」

「まあ、正解かな。けど、そうね、強いて言うなら避難準備かしら」

魔女は荷物片手にそう答えた。

「……戦争でも起きるのか」

「残念だけど、戦争ではない」

「じやあ、何があつたんですか？」

魔女が答える前に、ノエルは俺の前を通り過ぎて行つた。その横顔はあまり愉快ではなさ

そうだ。少女の背中をじつと見ていると、いつのまにか魔女は窓際に立ち、空気の入れ替えをしていた。

「協会から特使が来た。あの子を連れて行くって」

「え？」

「そんな顔しないで大丈夫よ。まだ何も起きていない。ただ面倒事には巻き込まれるかもしれないけど。とにかく協会にノエルを引き渡すか否かの場面」

平然とした顔で説明する魔女。俺は混乱しきった頭でなんとか言葉を絞り出した。

「……それでどうするつもりなんだ」

「今回の協会の態度は呆れるほどご丁寧だつたのよ。手紙にメールに特使。段階を踏んで私は迫つて來た」

「どうするんだつて言つてんだよ」

つい、俺は声を大きくして怒鳴つてしまつた。魔女はおどけたような表情で俺を見下ろしている。しかし、次の瞬間その顔は凍てつくように冷たい表情をしていた。

「私の家族は私の財産のひとつだ。それを渡せと言つてはいる様なもの。それを私が許すと思ふか？」

俺は彼女の迫力に圧倒され、答える事が出来なかつた。そんな俺をからかうように、魔女はすぐに元の表情へと戻つた。

「ということで、ノエルは事が落ち着くまで別のところに避難する予定よ」

「協会から追手がきたらどうする？」

「そのためにあの子を遠ざけとくのよ。ここに戦力を集中させて相手を迎撃つ。一番の本命は別の所で保管しといてね」

どうやら彼女の口ぶりからして、事態は既に進行しているようだ。俺はただ指示に従えばいいという事だらう。

「わかりました。俺は何をすればいいんですか？」

そう口に出した瞬間、俺は思つた。どうやら久しぶりに非日常に巻き込まれてしまつたなと。

魔女は相変わらず考え方をしているのか、じつと窓の外を見つめている。俺の声がまるで届いていないのか。俺は同じ言葉を3回ほど繰り返していた。

「おい『俺は何をすればいいんだよ!』」

怒気を強めて問いかけると、やつと彼女は俺の存在に気付いたようだつた。

「ああ、忘れてたわ」

「おい……」

「まあまあ。えつと、隠れ場所まではアンダーソン・カイルが送ってくれる事になつてい るの。ほら、名前ぐらいなら聞いたことあるでしょ」

たしか以前に何回か、会話の中で出てきた事がある名前だ。

「だからそつち方面は問題なし。それと仮に協会が私に詰め寄つても、ロイヤルティーとしての生活費が減るだけ。そこらへんも私がなんとかすればいい。だから、君が何かする必要はない」

「え……」

じやあ何のために——と思つたが、すぐに魔女は付け加えるように言葉を続けた。

「当初は君もボディガード的な感じでノエルと一緒に隠れ家に行く予定だつた。けど、戦力を二人もそこに割くことはできない」

「二人？」

「君が行けばリニアもついていくだろう」

確かに強く否定することはできない。俺はどうつかずな返事をした。

「ならば、もう君は関係してこない方が君にとつて一番いいのではないかって思つている」「けど、ここまで話を聞いておいて俺が無視できるとでも？」

口にした瞬間、俺もまずいと思つた。こんな台詞、俺らしくないじやないか。魔女も不思議そうに小首を傾げているが、口元だけはやけにニヤついている。

「……もしかして起きたら、夢見が悪いだろ。一応、知つてるやつだし」

「ふむ。及第点つてとこかしら」

「何がだよ」

俺はじとりと魔女を見据える。すると彼女はどこか優しげな瞳を向けてきた。

「ing……全部知つたのね」

「ああ。まあ驚きはしたけど」

「……私が話してもよかつたんだけど、君の周りが五月蠅くてね」

「いい奴らだよ」

「そうね」

ちらつと魔女が時計を見た。外ではノエルが大人しく待っているらしい。

「そういえば、俺にやることないとか言いながら何で呼んだんですか？」

「ああ、連絡してからやつぱいらないかなって」

「知らないだと？俺は彼女の物言いに若干腹が立ったが、

「けど、まあノエルのお見送りに来るだけでもいいかなって思い直して」

そう言つて彼女は俺を外へ追い返した。

「よつ。さつきはよくも無視して通り過ぎたな」

玄関を開けると、リュックサックを背負つた少女がひとり立つていた。彼女は俺につづけ
んどんな挨拶をすると、そっぽを向く。

「なんだよ、態度悪いな」

「別に。ちゃんと挨拶しましたけど」

久しぶりに会つたが、最初の印象と違いすぎだ。俺はがしりと彼女の頭を掴んだ。

「俺の記憶が正しいなら、お前は俺に泣きながら助けを請うてきた少女のはずなんだが？
お前はそれと同一人物か？」

「いたい、いたい離せ」

「公園で大声あげて泣いてたよな、お前」

「あああいうるさい」

ノエルは必死で俺に抵抗する。そして俺の手を振り払うと、不満げな顔で見上げてきた。

「大体、私がお前に優しくする理由がない」

そういうつてノエルは俺の向こうずねを蹴つた。場所が場所なだけに、少女の蹴りでもそれなりの痛みがある。一方のノエルは俺が跪いているのを置いて、すたすたと歩き出した。俺はその小さな背中を追うように声を投げかける。

「いつ戻つてくるんだ」

「……知らない。私には何も決められない」

「じゃあ何で行くんだ」

俺の問いかけにノエルは一度だけ振り返つた。

太陽に透けるほど綺麗な金髪が、彼女の顔にかかる。少女らしい声で彼女は静かに答えた。

「死にたくないから」

そう告げると、ノエルは真っすぐと俺に背を向けて歩いていく。俺は一人、玄関の前から動かず、ただじっとその背中を見ていた。そして誰に言うのでもなく、そつと呟く。

「つたく……かつこつけやがつて」

それはため息にも似た程、無意識に出た言葉だった。

「日本支部に行つてくる」

教務室はまるで時が止まつたかのように何一つ音がしていなかつた。

やがて、魔女が口を開く。

「どういうつもりかしら、鈴木君」

「先手を打つてくる。まあ、もう既にむこうの部隊が動いてるかもしれないけど、少しは戦力を削ぐ事が出来るかと思つて」

「なるほどね」

魔女はまるで関心がないかのように、止まつていた手を動かした。彼女の手はひたすら書類の整理に追われているようだ。

「とりあえず、私もサポートできる範囲のことはしてあげるわ」

「俺の武器を出してくれ」

魔女はすぐそばの戸棚を指さした。俺は彼女の示す通り、その戸棚を開けると奥の方に金属製の鞄が見えた。前回の戦いで使用したこともあり、埃はかぶつていなさそうだ。

俺は鞄の中から筆記用具をわしづかみにした。油性か水性か。俺は迷うことなく油性のペンを手にした。こちらの方が発動時間が長いのだ。更に俺は鞄のポケットから麻酔銃を取り出した。

「……あれ。先生、これ修理頼んでたはずなんだけど

「あ。ごめん、忘れちつた」

べろりと舌を出して謝る魔女。悪気を全く感じないのは、彼女が魔法でも用いているせいなのだろうか。俺は舌打ちひとつで彼女を許すと、別のものを用意することにした。クロスボウに短剣、馴染みの武器を身につけて俺は立ちあがる。

「先生、防弾服は？」

またもや彼女は無言で指さす。隣のキヤビネットを開けると、当たり前の様に俺の防弾服が掛けられていた。俺は一度も手を止めることなくそれを着こなす。そのなめらかな動きに自分でも驚いていた。もしかしたら頭は追いついていなくても、俺の身体は既に非日常にどっぷりと浸かっているのではないかと。

「……初めてね」

ふと、魔女が俺に声をかけた。

「何が」

「自らその服を着て、自ら厄介事に首を出すのは」

「……まあ確かに、20代になつては初めてだな」

「何か心境の変化でもあつた？」

「別に。俺は変わつてない……俺はその時の考え方で動いているだけだ。ただ今回は問題が問題なだけであつて……ノエルは先生の家族だし、俺にとつても同僚……友人みたいなものだからな」

魔女は静かに息を零すと、一度だけ俺の顔を見上げた。

「奏のこと……よろしくお願ひします。もうすぐ帰つてくるだらうし」

「ええ、こつちのことは万全にしておくわ」

魔女の言葉を聞くと、俺は彼女に背を向けて歩き出した。

「頑張つてね……鈴木聰太くん」

部屋を出る前、微かに小さな声が俺の背後に投げかけられたような気がする。

青年が立ち去った後、机の上の書類を目で追いながら、天城はひとり考えていた。

「君を教えたのは結果的に良かつたのか」

教務室には彼女以外いない。漏らした言葉は宙へ霧散していく。

「今回は短期戦で終わるはずだ」

彼女自身、自分の口から出ている声に気づいてはいないのだろう。

「この件が解決したら、今度は——」

「ん？ 何だ、これは」

日本から遠く離れた地。都市の中心部からはほんの少し離れた場所にある住宅の一室で、
男は訝しげな声を上げた。

彼——ケラーの手元には一通の手紙がある。宛先人のところには何も書かれていなかつたが、どこか既視感のある文字に、彼は僅かな胸の高鳴りを覚えていた。大雑把に封を開け、中の手紙を取り出すと真っ先に便箋の一番下の部分に目がいった。

「エドモン……？」

彼が知つてゐるエドモンは只一人しかいない。手紙の内容は様々だつたが、いずれも何一つ近況を知る事が出来ていなかつた彼にとつては有益な情報ばかりだ。

「なるほど……」

急進派が壊滅して以来、ひつそりと余生を送つていたケラーは久しぶりに遠出をすることにした。厚手のコートに腕を通し、数日分の仕度をする。

「あら、お出かけですか？」

きつちりと着こんだケラーを見て、彼の妻は面を食らつた様子だつた。だが、その顔色からは僅かに不安げな色が伺える。

「大丈夫だよ。ちょっとした用事だ、すぐに帰つてくるさ」

そう言つてケラーは自身の妻をあやすと外に出る。そして青々とした空を見上げた。

昼下がり。

やかましい騒音を立てて、車は都内を走っていた。運転席にはアンダーソン・カイル。その後ろでノエルは、まるで人形のように何も言わずに、ただ外の景色を眺めていた。二人の間に会話は無い。荷台に積んだ荷物が揺れる度にかちやりと立てる音以外、無機質なエンジン音のみが車内には響いていた。

「はあ……」

ノエルの口から小さくため息が漏れる。アンダーソンの耳には届かないほど小さな吐息だ。事実、彼女にも疲れがたまつていた。etcの文書の一件以来、彼女の生活は平凡そのものだつた。幼稚園の仕事は強引にさせられていたが、研究所の仕事とは全然違つていた。そして、ノエル自身、全く楽しくないわけでもなかつた。それなりに普通の生活をしていた中

の突然の脅威。彼女の心は深く沈んでいる。

「気が進まねえな……」

まるでノエルの心中を言い当てたかのような発言が運転席から聞こえた。どうやら、彼の独り言らしい。しかし、思わず彼女はそれに反応してしまった。

「何で気が進まないの」

突然帰つて来た声にアンダーソンも僅かに驚いたようだつた。彼は一瞬の間を開けて答える。

「お嬢ちゃんにはあまり理解できなかもしれないが、俺はいま全てを諦めているところなんだ」

そう、アンダーソンは自身の行動が立派な命令違反だとわかつていた。反逆したと思われても仕方がない。任務放棄のみならず、件の研究所の人間を匿おうとしている。おそらく今回の件がひと段落したところで、協会に彼の席はないだろう。しかし、そのリスクを負つても、彼の人間性は今回の任務を受け入れることはできなかつた。

そして彼自身も気づいていた。これは協会が自身を追放するための策なのだろうと。前政

権時から最も魔女と情報共有ができる立場の人間であり、親魔女派の筆頭とも言うべき人物を組織的に追放するにはどうすればいいのか。おそらく協会もアンダーソンが離反するというこの状況を、幾らか予想していたに違いない。

「命令に従つても殺され、従わずとも殺される。それなら自分の思った通りに行動する方がまだマシだ。自分を殺して、魔女の手にも殺される。二度も死ぬのはごめんだからな」アンダーソンは奥歯をきつく噛みしめた。

「ああ……周たちに会いてえな」

ふと、心細くなつた彼は、かつて共に戦つた友人の顔を思い出していた。今すぐにでも彼らに自身の状況を相談したくてたまらない。しかし、彼は日本にまで來たと言うのに、未だ金色の魔女とこの少女以外とは顔を合わせていなかつたのだ。

「ねえ、この車あなたのもの?」

アンダーソンが零すひとりごとにノエルも何か話す気になつたのか、彼女はずつと前を向いている運転手に声をかけた。

「車か? ああ、協会からの支援だ。一応俺は出張中のエリート外国人みたいなものだから

な

「……どうしてそんなエリートの人が私を保護するの？」

ノエルなりの皮肉だろう、アンダーソンはぴくりと眉間にしわを寄せたがすぐにそれを解いた。

「君の運が良かつたとしか言えないね。もしも君が男だつたり正体不明のロボットであつたら、俺は迷わず協会に送つていたに違ひない」

「なにそれ……あ、私それ知つてるわ。ロリコンってやつ？」

「ちつげえよ!」

アンダーソンは思わずアクセルを踏み込んでしまつた。目の前は赤信号だ。慌てて彼はブレーキを踏む。車内が大きく揺れた。

後部座席にも彼の焦りが伝わつたようだ。ノエルも今の中止に目をパチクリとさせている。だが、口元からは僅かに笑みが漏れていた。

「ねえ、どこに向かってるの。私、何も知らないんだけど」

「どこって言わてもな……町のはずれって言えばいいのか？そこのナビ見たらよくわかるぞ。まあでも、ここまできたらあと1時間くらいだろ」

ノエルは前の座席の間から顔を出す。ナビと言われた機械をじっと見るが、いまいち理解し難かった。

「そこってどんな所？広いの？」

「広さは充分だな」

「パスタは出る？私パスタ好きなの」

「それはそこに住むじいさんに言つてくれ」

運転に集中するためか、適当に会話を流すアンダーソンの態度にノエルは頬を膨らませた。そしてひょいと顔を引っ込める。再び外の景色に目を向ける。

「ねえ、私は生き残れるかな」

「……さあな」

「ふう……」

一仕事を終えて、魔女は席を立つた。机の端には数枚の紙束が置かれている。これは幼稚園のものとは関係ないものだ。アンダーソン・カイルがこれ見よがしに置いていつたものだろう。彼女は仕方ないといった様子でそれに目を通すことにした。

「……呆れた」

そこに書いてあつたのは今回の協会側の意向についてだ。協会は魔女が従わない場合はロイヤリティーを白紙に戻すとしていた。妥当な判断だ。一般社会を生きて行く上で最も重要な資金源を経つ。確かに彼女にとつてもそれは相当な痛手だった。居候含め本人を養っていくには、幼稚園からの収入では賄いきれない。

「あらら、随分と」「丁寧に調べていらっしやること」

書類は全て手書きだった。おそらくアンダーソン自身が書いたものだろう。魔女は一通り書類に目を通していた。しかし一枚目をめくった瞬間、彼女の表情が一変する。彼女はぞんざいにその書類を机の上に放置すると、真剣な顔つきで口元に手をやつた。

夕暮れの教務室。時計の針の音だけが響いている。

下から突き上がつてくる風と轟音を耳にしながら、俺は財布を取り出した。協会本部までの移動手段は地下鉄を使つていくしかない。ICカードをチャージした俺は、続けて切符を購入すると後ろで待つて いるリニアへ差し出した。

協会本部はこの都市の中心部にある。ここからだと幾つもの駅で乗り換えをしなくてはならないので、かなり面倒だ。だが、行くしかない。

俺が改札を抜けると、リニアも黙つて俺の後をついてくる。幼稚園を出てから俺たちは一度も会話をしていなかつた。別に喧嘩をしたわけでもない、ただ互いに何も口にしなかつただけである。

そんなわけだから、俺は電車を待つてゐる間、じつと線路を眺めているしかなかつた。きっとこの線路の上でも死んだ奴がいるのだろう。自ら戦いに赴こうというせいもあつてか、俺の脳内に暗い思考が流れてきた。しかしそれは列車の到着によつて、一瞬で白昼夢のように霧散した。

揃つて列車に乗り込む。やがて通常通りのスピードになつた頃、唐突にリニアが口を開いた。

「……不幸だと思つたことないの？」

脈絡もなく投げかけられた言葉に、俺は一瞬聞き間違いかと自身の耳を疑つた。だがしかし、彼女の当惑した表情からして、今のは紛れもなく彼女の口から、それも思わず口をつ

いて出た言葉なのだろう。

「……急になんだよ」

「いや、えつと……だから、その……3年前の事件から嫌々巻き込まれて、友人も失くして、心に重たいものを背負つて……たくさんの大切なものを失つてきたのに……全部自分の能力が原因だなんて言われたら、私だったら立ち直ることはできないと思うから……」
めん、今のは無意識で出た言葉だつた」

俺はリニアに何も返すことはなかつた。ただ地下鉄の音が鼓膜に響くばかり。気づくと、電車は隣の駅に到着したようだ。俺たちの目の前の席が空き、俺はリニアに席を譲る。

「え、いいよ。聰太の方が荷物多いでしょ」

「いいから座れ。これくらいの気づかいはできる」

するとリニアは照れ笑いを浮かべながら、俺の目の前に座つた。列車は次の駅を目指して動き出す。俺の目の前にリニアが座る事により、自然と俺たちの視線は絡み合う事になる。一瞬の静寂の後、再びリニアが声をかけてきた。その瞳は俺からの答えを待つているようである。

「……聰太、さつきの話なんだけど」

「……不幸かと言われば不幸だ。けど、人間生きてたらそういう風に思う事はいくらでもあるだろ……確かに、俺は3年前の事件以降、不幸になつた。それは間違いない。けど、後悔はしていない、というかしたくない。あの時の俺が自分で選択したように、他の奴らもそれが正しいと思って選択した結果なんだ……だから、変な気づかいはいらない。それに社会的にみれば、俺はちゃんとメシが食えてるし、家もあるし、学校にも行けてる。だから総合的には普通つてやつじやないか?」

「……そつか、そうだよね」

そういうと彼女は、どこか安心したような頬笑みを浮かべて俺から視線を逸らした。
その後、目的の駅に着くまで俺たちは何も話さなかつた。

床から天井までびっしりと並べられた本棚、深いワイン色をした豪華な絨毯。おそらく人里はなれた屋敷なのだろう。外からの喧騒はなく、音という音と言えば小鳥のさえずりと――老人が対面しているモニターだけだ。

『随分と久しぶりだな、えつと……お名前は?』

「戯れに付き合うほど暇ではない。用件だけを述べて頂きたい」

モニター上の男とは反対に、ぶつきらぼうとした老人は笑顔ひとつ浮かべることなく、じつと男を見据えていた。男の方もそんな老人の態度には慣れているのか、臆する事なく言葉を続けた。

『そちらも聞き及んでいるとは思うが、息子さんが我々の命令に対し、単独行動を行っているようだ』

「それで?」

『息子さんの件を放免にする代わりに、協会の方に戻つて来てもらいたい。前政権と現政権との間に確執が生まれてきていてね、前政権内でも支持の高い君に橋渡しのような役目をしてもらいたいんだ』

「俺の様な老いぼれの橋なんざ、すぐに崩落するぞ」

眉ひとつ動かさずに告げる老人に、なおも男は好意的な笑みを浮かべた。

『ははっ、素敵なジョークだ。けど、あなたほどの人物ならまだ大丈夫』

「目的は何だ』

『全ては現状を維持するため』

その言葉に、やつと老人の顔に表情が現れた。

『アルゼンチン……俺の記憶が正しければ、君は選挙に当選した後、前政権時の要職連中を形式上、しかも末端の席に数人だけを残して全て一掃したと思うんだが?』

皮肉の籠つた笑みで老人はアルゼンチンと呼んだ男を見据えた。

『……当時は色々と事情があつたんだ。今はもう関係ない話だ。それと、そのアルゼンチ
ンという呼び方は辞めて頂こう。私はいまや協会長という地位にいる』

『そうか、だが俺はずつと変わらないだろうよ、アルゼンチン』

男の口からはいつのまにか笑みは消えていた。そして、彼は眉根を寄せて今一度、老人へと迫る。

『ひとまず利害関係を整理しよう。私は前政権と現政権の調和、つまりあなたの復帰だ。そしてあなたは、息子さんの件を水に流し処分を撤回される』

そういうと、男は隣にいる秘書と思しき男に視線を送った。その人物の手には奇妙なスイッチが握られている。そして、男の指示と共に今、それが押された。

老人は静寂が落ちたモニターをじっと見据えているが、何も変化は起きない。だが、やがて画面は男から外のカメラへと変わった。フランス・パリ本部。それは紛れもなく彼が長年勤めていた職場だ。しかし、今そこに映されている映像には一ヵ所、黒々とした煙をたなびかせ、無残にも中身がえぐられたような場所があつた。

瞬間、老人の瞳にも驚きの色が浮かんだ。それと同時にカメラは切り替わり、先ほどの男の姿が画面いっぱいに再び映った。

『お察しの通り、息子さんの職場だ。さて、ジエームズ。君はどうする?』

「……野郎」

老人は唸るような声を零した。

『ジエームズ、そんな態度をしないでくれ。それじゃあ、まるで我々が悪人みたいじやないか。悪いのは研究所の連中だろ』

老人は何も返さない。男はやれやれといった様子で背もたれに深く沈みこんだ。

『まあ、いい。明日にでも答えをくれ。健闘を祈るよ、ジエームズ』

そういうと、プツンっと映像は途切れた。しばらくの間、真っ黒な画面を見続けていた老人だったが、やがて外から聞こえてきたエンジン音を耳にすると、さつと椅子から立ち上がった。

「……やれやれ、また息子のやつが厄介事を持ち帰つて來たか」

屋敷から数メートル離れた丘のような所で車は止まつた。中から2人の人物が出てくる。一方はぶつきらぼうな顔で、一方はどこか緊張している様子だ。

アンダーソンを先頭に、ノエルは後ろ手に鞄を引きながらその後をついていく。屋敷は見えているが、ここから先の道は車で行くことはできないので、人は徒步でそこに向かつた。門の前に立つと、アンダーソンでさえ僅かな緊張を覚える。それほど目の前の屋敷は豪華と言わざるを得ないほどの建物だった。

アンダーソンは一息つくと、呼び鈴を鳴らした。豪華な建物に不釣り合いな簡素な音が響く。返答はない。

アンダーソンは再び呼び鈴を鳴らした。じつと自身の指先を眺めているが、なおも帰つてくる声はない。

「親父三いるのはわかつてゐるんです、ドアを開けてください!」

いよいよアンダーソンは掛金を上下に激しく振つて来訪を知らせる。しかし室内からは、この家は無人だとでも主張しているかのように物音ひとつ聞こえなかつた。

このやり取りをずっと後ろで眺めていたノエルはふと、アンダーソンの隣に立つと、彼が

何かを言う前にその小さな足をドアに向けて繰り出した。先ほどよりも激しい音が響く。しかもノエルは相手の返答を待つことなく、次々とその強固な扉を蹴り続けた。

やがて、扉の中から物音が聞こえてきた。ぎいっと音を立てて、老人が顔を出す。老人は不愉快そうな顔で彼女を見下ろした。対する彼女も不愉快そうな顔で老人を見上げている。

「やかましいぞ」

「……扉があかないから」

彼は少女から顔を上げ、息子の方を見据えた。

「私の書斎からここまで来るのに、どれだけ時間がかかると思っているんだ。耳も聞こえづらくなっている。そもそも来訪の連絡すらなかつただろう」

「それは」

「ふーん、年寄りで耳も遠くて、足も遅い。なら何で一人で暮らしているの？」

アンダーソンが答える直前、再び少女が口を挟んだ。老人は先ほどよりも更に眉間にしわを寄せて、息子に視線を送った。

「私の勝手だらう。それよりこいつは誰だ」

「話すと長くなります。親父、まずは中に入りましょう」

老人は何も言わずに、アンダーソンを上から下までじっくりと眺めた。そして、彼はふいつと家中へと戻つていく。後ろがついてきているのかも構わず、彼は居間を目指して一直線に進んでいった。まるで背中で、ついてこいとも言つているようである。

地下鉄から出ると、俺は今日がいい天気だつたということを思い出した。雲ひとつない、青。何の混じり気もない、きれいな空色だった。

しかし、何故か俺の顔は晴れない。もちろんこれから大変な事が起きると言うのもあるだが、

「……そろそろ新学期か」

それに伴う学費の工面。どうしようか。

「聰太？」

俺がぼんやりと空を見上げていると、いつのまにカリニアは随分と前の方にいた。

「まずはこつちを片づけてからだな」

東京のど真ん中。雲の上まで伸びていそうだと思うほどの超高層ビル群。協会も表向きの顔は堂々と立派な大企業だ。どこかで必ずは耳にした事のある企業看板の数々、それらのビルに負けず劣らずの高さのビルの前で俺たちは立ち止った。

「リニア、お前社員カード持つてるよな?」

「ん?ああ、持つてるよ」

そう言って彼女は財布からカードを取り出した。一応、身分証明書のひとつでもあるはずなのに、そこに映っていたのはまるでカードを見た人間を小馬鹿にでもしたような顔だった。

「……」なんどよく通つたな」

呆れ半分のため息をついて、俺はカードをリニアに返した。

「とにかく、これがある以上俺たちが内部に入るのは簡単なはずだ。おそらく大企業の体裁を取つてゐるだろうから、中には一般人の社員もいるはず。その人たちになるべく傷つけないようにしよう」

「それで？」

問い合わせ返すリニア。おそらく作戦の具体的な内容を知りたいのだろう。しかし、俺の頭に浮かんでいたのはきつと突拍子もない事に違いない。

「聰太？」

「……とりあえず重要人物が上にいるのは違いない。それも協会専用の階があるはずだ。だから、その……秘密通路みたいなものを」

「なるほど」

リニアは俺が思つていた以上にあつさりと領き返してくれた。そして人差し指をぴんつと上にあげる。

68.psd

「とりあえず中に入つて探してみよう」

そういつてリニアはまるで外回りを終えた社員のような堂々とした足取りで入口へとむかつた。俺も慌ててその後を追うが、やはり気後れしてしまう。そもそも服装からしておかしい。外見だけでもスーツを着込んでくれば良かつたのかもしない。

「ほらほら、聰太。びびつてないで!」

「だ、誰がびびつて……!」

ビルに入ると、そこは大企業の名にふさわしいフロントだった。高級感のあるタイルが床じゅうに敷き詰められ、どの壁を見てもきらきらと輝いてる。

「これが会社か……」

以前にインターネットでいくつかの会社を回つたが、それとはまったく規模が違う。張り詰めた空氣、いや、お金の空氣とでもいうようなものがそこには漂つていた。

「さてと、行きますか」

リニアの声に俺は、はつと現実に戻る。彼女はこのような空気をものとせず、意氣揚々と社員カードを警備員に見せた。俺は彼女の連れという設定だ。

一度だけちらりと警備員が見ただけで、俺はすんなりと内部に入る事ができた。リニアは既にエレベーターの方へと向かっている。俺も慌ててその背中を追つた。

エレベーターの中で二人きりになると、やつと俺は一息つくことができた。

「……お前は気楽そうだな」

「まあ気は楽だね」

彼女は俺の気も知らずに、あっさりと答える。

「だつて私は聰太が手伝つてつて言うからついてきたんだもん。だからそれほど氣負いもないし。大体が今回の件は本当に『他人事』だからね。聰太が言わなかつたら私も動かないつもりだつたから」

冷徹とも取れるが実際はそういうものなのだろう。俺も特に彼女の発言を気に留めること

はなかつた。すると彼女は、付け加えるように口を開く。

「もちろん、これが正しい行動だと思つてゐるから私も動いてゐるんだからね。それに何か冒険の予感がして」

リニアは目を輝かせていた。

どうやら本当に氣負いはないらしい。

建物の一室。通常よりも多くの窓があるせいか、あるいは周囲の建物同様に高層の位置にあるせいか、照明をつけなくても部屋の中はとても明るかつた。

部屋の奥には縦に長い丸テーブルが横たわつており、典型的な会社の会議室に相違ない。しかし、今そこには一人の男が窓の外を眺めて立ち尽くしているばかり。口角は僅かに上がつていた。

「食事はもう終えたのですか？」

突然、男の背後で扉が開き秘書と思しき男がはいつてきた。対する男は、特に驚きを示すことなく淡々とした口調で返す。

「ああ、そういえばまだ食べていなかつたな」

「忙しいとは思いますが、何かお食べになつてください」

「そういう君も今朝から何も食べていないだろう」

男は試すような視線で秘書の男を見返した。すると、図星だったのか彼は気まずそうに男から視線を逸らした。

「私は平氣です。合間に何か食べるつもりですから」

「そうか。それより現在の状況は」

「予想通りです。アンダーソン・カイルは父親の所に向かいました。改造人間もおそらく一緒だと思われます。我々の手の届かない安全な場所は、魔女の家かそこしかないと考えたのでしよう」

秘書の男はまるで資料を読み上げているかのように淡々と述べていたが、微妙に間を空け
ると、

「金色の魔女からは何も返答は得られておりません」

ふと、静かに報告を聞いていた男の顔色が変わった。

「こちらも予想通りだな。自身は動くことなく様子を見る……か。あの女狐め」

「ジエームズ・カイルの方はどうなのでしょうか」

忌々しげに唇を噛む彼に、傍に控える男が問いかけた。すると彼は、先ほどよりも僅かに上ずつた調子でそれに答える。

「ジエームズ・カイルが我々に協力する可能性は殆どない。だが、息子が関わつてると知つた今なら或いは。いずれにしろ我々が取る行動は既に準備されている」

「……そうですね」

「他に何かあるか」

男が促すと、寸分の間もなく部下は答えた。

「リニア・イベリンが鈴木聰太と共に動き出しました」

「ほう」

「金色の魔女が何かしら絡んでいるかと思われます。行く先はおそらく協会日本支部です」
報告を聞き届けた男は、何も言わずにゆっくりと机の上に手をおいた。何か考えがあるのか、部下は何も反応がない上司に恐る恐る訊ねた。

「……日本支部に応援は送られるのですか？」

「はつ……そんなはずないだろう。他にも人手が足りないところはいっぱいあるんだ。今回は後片づけ程度の人員で充分だ。我々の目的はジエームズ・カイルの方にあるんだからな」

そう言つて男は椅子の背もたれに身を預けた。しかし、しばらくして思い出したように口を開いたかと思うと、

「そりいえば、日本支部には奴がいたな」

「奴？」

「フーゴ・ベル。彼がリニア・イベリンと遭遇する可能性もなくはないか。おい、支部の監視カメラはちゃんと作動しているんだろうな」

「はい」

部下は返事をすると、また別の用件があるのか。再び違う話題へと移つていった。会議は依然として続くようである。

その家はとても大きな廊下を持つていた。大人5人が横一列に立つても窮屈さひとつ感じないほどだ。そのためアンダーソンら3人が、並んで歩いてもいいのだが何故か彼らは、老人を先頭に各々その背中を追うばかりである。更に後ろ二人はきょろきょろと周囲を見回しており、緊張を抱いているのは明らかだつた。ノエルはもちろん、息子であるアンダーソンもこの屋敷に訪れるのは初めてであつた。

ふと、老人の足が止まる。まだ目的の部屋にはついていないと言うのに、彼は後ろを振り返った。そして何も言わずに息子の顔を見つめる。それはどこか複雑そうな顔だつた。普段から、細長く、ややつり上がつた目つきをしている彼の顔は、見る人を緊張させるが、今はそこに何かしらの感情を乗せてているため余計に変な勘ぐりをさせてしまうのである。

「……親父」

「大人しくしていると思つていたらこれか」

老人の苦言にアンダーソンは顔を伏せる。そんな彼に、老人は少しの情けもかけることはなかつた。

「間抜けな奴め」

そう吐き捨てるに、老人は懐から何かを取り出した。それは一瞬で人の命を刈り取る事ができる代物であり、凶器であり、

「それは……」

アンダーソンの背後で息を飲む声が聞こえた。

老人が手にしていたのは、以前ノエルが使用していた拳銃だった。

協会は通常、一般の企業として偽装しているが、中身も徹底していた。そこで働く人物は一般の人間と、協会に通じている人間の両方。しかし彼らは部署できつちりと分けられており、会話を交わす事もない。だが、例外としてアンダーソンのように両方の部署に配属されている人物もいる。

「……だから私にこういう仕事が回つて来たんですね」

日本支部課長の柳公平はうんざりとした顔を隠すことなく、目の前のモニターを見上げた。そこに映っているのは一人の男。態度からして、柳よりも幾分上の立場にいるようだ。

『後始末は頼んだぞ』

「後始末ね……この年にもなつて」

柳はため息と共に、傍に置いてあつた灰皿に煙草を預けた。そしてネクタイを緩めると先ほど以上に気だるそうな態度を露わにする。しばらくの間、気が進まない、気が進まないとぼやいてた彼だが、画面上の男が何も反応を示さないと、諦めたのだろうか彼は再び煙草に手を伸ばした。

のろのろと上がる煙が、送風機の風に流されて目の前を横切っていく。その緩やかなスピードがどこか自身と似ていて、思わず彼は口元に笑みを浮かべた。

「……それでブリーゲルさん。今回の事件で最も汚い仕事を私に押しつけてくるなんて、もしかして私あなたに嫌われています？」

『そういう感情はない』

淡々と答えるハンス。柳はやれやれといった様子で天井を見上げた。普段はこの部屋で協会関連の内容を話すことはない。本当に一般企業として会談するための部屋だ。いわば、この部屋は柳にとつて現実的空間のはずだった。それが突然入つた一本の電話によつてこうも崩される。

元々、柳は協会の人間が好きではない。更に言えば、母国で働く事を選んだのも、気難しい協会本部で働くのは気が滅入ると思つたからだ。もちろん母国にいるからと言つて、簡

単な事務的な仕事ばかり回つてくるわけではなかつたが。

『仕度はどのくらいでできる』

「どのくらいって……緊急の要請じやないんですか？すぐに準備して、向かいますよ。こ
つちもそんなに人は割けないんで15人ほどで」

『充分だ』

ハンスの返答を聞くと、柳は立ちあがつた。何本も続けて煙草を吸つていたせいか、軽く
眩暈を覚える頭を振りながら、彼は晴れ渡つた空を見上げる。そして途方に暮れたような
様子で呟いた。

「アンダーソン・カイル……何でこんな面倒臭い事、起こしちやうかね」

『それよりもジエームズ・カイルとどのような話し合いがされているのかが気になる』

先ほどの短い返答ではなく、ハンスが会話に入つて来てくれた事に、柳はやつと誰かと話
している様な気分になつた。

「ジエームズ・カイルか。都落ちした年寄りが今更何するつていうんですか……といふか、

ブリーゲルさん、知り合いじやありませんでしたっけ?」

そう言いながら柳は、ジエームズの顔を浮かべた。それは3、4年ほど前の記憶。政権が変わると言う節目の時にちらりと目にしたことがある程度だ。

『知り合いだが、今回の仕事には関係ない』

公私は弁えていると……柳は心中で皮肉を言いながら、再び煙草へと手をかけた。

『協会の命令を反故したアンダーソン・カイルはブツを手にして、自身の父親の住まいに逃走したと聞いている』

「けどアンダーソン・カイルも馬鹿じやない。私は何か事情があると思いますけど、ブリーゲルさんはどうお考えですか?」

『さあな』

硬く口を結ぶブリーゲル。せつかくの会話ムードがあつという間に事務報告に化してしまったことに、柳も顔をしかめた。

「いやいや、ブリーゲルさん。こつちも後始末は頼んだって言われても……詳しい事が分

からない限り動けませんよ』

『全てを知りたいか、柳』

ハンスは一瞬の間もなく、柳の意志を肯定した。何の障害も、壁もないその返答の早さに、逆に柳の方が怯んでしまった。

「いいですよ……中間管理職の私には、このくらいの情報量がぴったりですから。とにかく、私はその後始末つてのをすればいいんですね？」

『ああ、君に全て任せる』

柳はやれやれといった顔でモニターの方へと向き直った。

「はいはい。分かりました、分かりましたよ。どうせここで私が引き受けなかつたら、身の安全は保障されないってね。ああ、誤解しないでください、私は何一つ不満を持ち合わせちゃいないですよ」

ブリーゲルは黙つて男の顔を見ていた。やがて、柳の顔は今日初めてと言つていいほど真剣なものへと変わる。

「ブリーゲルさん、私は自分が不利だと思つたら簡単なとこに逃げるんですよ、死ぬのは御免なんで」

そう言つて柳はブリーゲルとの回線を切つた。そして企業側へ外出の連絡をすると、部屋を後にした。

柳は廊下を歩きながら、自身の身の上を考えていた。金銭的な蓄えはそれなりにある。退職をしたとしても、今より生活は苦しくなるが妻たちが食べていけない事はないだろう。しかし、全てが穏やかにいくわけではない。

「これも私の運命か……」

柳は心を決めると、一気に顔を引き締めた。今回の様な任務は初めてではない。ただ家庭を持つてからはしばらく回つてくることはなかった。それ故、彼は困惑しているのだ。

「そういうのにはおあつらえ向きの人員がいるだろうに……何で俺に……」

そろばやきながら、柳は足を進めるのであつた。

数年前の話だ。突然、父親が実家ごと外国に引っ越しをした。

アンダーソンの記憶に残っている事実はそれだけだった。事前の相談もなく、政権が変わることや否や、彼の父親は忽然と長年住み慣れた家を手放したのだ。

英國に住んでいた当時は数多くの使用人が住みこみで働いており、おまけに多くの学者や協会の人間が出入りをしていたため、家の中は常に人であふれていた。

しかし、今アンダーソンが歩いている家は以前のそれとは全く違う。すれ違う人は誰もない。廊下に飾られていた写真や勲章もない。唯一、以前と似通つて感じられるのは建物内に漂う古風な雰囲気だけだ。

しばらくすると、3人は目的の応接室についた。老人は自身でストーブに火をつける。照明が備え付けられているにも関わらず、どうやらストーブの明かりで充分の様だ。

アンダーソンは周囲の様子を見回しながら、殆ど無意識にポケットに手をあてた。そしてその妙な重さに違和感を覚えた彼は、はつと思ひだした。ポケットからゆつくりと手を出

してみる。

そこに握られていたのは、アンダーソンの手の中では随分と小さく見える拳銃だった。

「ほら」

そういうつて、アンダーソンはノエルへと拳銃を返した。彼女はまさかそれが自身の手元に帰つてくるとは思つておらず、しばらく呆気にとられた様子で彼の手を眺めていたが、やがてその拳銃を手にした。するとアンダーソンの手には余つていたそれは、彼女の手元の中でぴつたりとその存在を主張し始めた。ノエルは何事もなかつたかのような顔でそれを鞄にしまうと、再び室内をぐるりと見回し、

「ねえ、どこに座つていいの？」

「どこでもいい」

老人はぶつきらぼうに答えるが、その目はノエルの傍にあるソファを指していた。何の断りもなく彼女がそれに座り、老人も一人用のソファに座る。そしてアンダーソンも老人の向かいに座ると、さつく彼は話を切り出した。

「現在の状況は？ 協会はもう動き出しましたか？」

「ああ、お前のせいで俺の所にも連絡がきた。今回の件でお前の地位もだいぶ揺らぐな」

「ええ、おかげさまで。大変な事になつてます」

「ほう。随分と落ち着いているな」

そういうと、彼らは揃つて視線を床に落とした。互いにあまり良い顔ではない。早く打開策、対抗策を考えねばならなかつた。

「……全く策も無しに行動しおつて」

「小言ですか？」

「ああ、そうだ。お前は一体何を」

「そうですよ。間違えたんですよ、選択を。けど、これは正しい事をしていると思つてます」

アンダーソンは有無を言わせないといった瞳で、老人を見据えた。しかし、彼にも親としての威厳がある。老人も真つすぐとアンダーソンを見返した。

「正しいといふことが賢明ということではない。私はお前の親だ。私はお前が何かする度にその隣に立つて意見を言い続ける」

「親父……俺だつてもう30超えてるんですから、いい加減……」

アンダーソンが疲れたように額に手を当てる。老人はその様子を見て、ふんつとしたようにな顔をそむけた。ノエルはといふと、目の前で交わされる親子の会話に何も関心を示すことなく、自身の手に戻つて来た拳銃を見つめていた。

「そういえば、あの拳銃はどこで？」

ふと、アンダーソンが顔を上げると、老人は明らかに不機嫌な様子でノエルの手元に視線を送つた。

「昨日、速達で届いたんだ。何故か私の方で着払いになつていて。送り主は例の幼稚園から、『全部直しておいた』という手紙と共に。どうやらお前の顔を見る限り、我々は金色の魔女の掌の上で踊らされていたというわけか」

その言葉にアンダーソンは先ほどの幼稚園での会話を思い出し、どつと疲れを覚えた。要是既にこういう結果になると魔女は踏んでいたのだ。アンダーソンはひとまず体を休める

ために、紅茶を飲むことにした。しかし、目の前の老人に頼む事も出来ず、使用人もいない。仕方なく、彼は自身で席を立つことにした。

「……、キッチンはどうにあるんですか」

「キッチン？ 何をする」

「喉が渴いたんですよ」

「キッチンはむこうだ」

老人の大雑把な物言いにアンダーソンは、ぶつぶつとぼやいた後キッチンへと向かつた。おそらく彼の言いようでは、応接間からそんなに離れた位置ではないのだろう。

アンダーソンの予想通り、キッチンは応接間から2、3奥の部屋にあつた。一人暮らしの老人らしく、食器棚には両手で数えきれるほどの僅かな食器類しかない。アンダーソンは種類の異なるカップを3つ手に取り紅茶を注ぐと、その大きな体つきには似合わないほどゆっくりとした動きで、お茶を運んだ。

「一応、ここまでの経緯を説明します」

三人は暖かい紅茶を口に含みながら、応接室で話を続けていた。

「協会から改造人間を連れてこいという命令を受けました。御存じの通り、数年前に政権が代わって以来、協会内でも何かしら変化が起きているように思われて」

「変化とは？」

老人は紅茶を手にしたまま、視線だけをアンダーソンへと向けた。

「それは……我々、協会の目標は現状を維持することです。しかし、今の協会はそれと相反した方針を取っているというか……正直、3年前の事件も協会内の政治的権限を強化するためだつたとしか思えません。

「それは違う」

「ですが、派遣された人員も殆どベテランの人間ばかり。こちらの被害は最小限に済みました」

「アンダーソン」

突然、老人は彼の名前を呼んだ。そして諫めるように口を開く。

「あれは戦争だ。現状維持という言葉を盾に我々は我々の地位を守ろうとした。眞実がどうであろうと、それが現実だ」

その言葉にアンダーソンは何も言い返す事が出来ずに俯いた。対する、老人は先ほどからずっと自分たちの会話を眺めている少女に目を移した。

「それで、お前は協会からの命令に背いてこの少女を連れてきたと？」

「……はい。俺がその子を連れ帰ったとして、協会が何を行うかは想像できるんで」

老人は再び紅茶を口に含むと、じつと眼を閉じた。

「私の記憶が正しかつたなら、お前は私が協会を出て行く時に私から勘当を食らつたはづだが？ もう二度と顔を合わせる予定はないのではなかつたか？」

「……緊急の事態だつたんで」

「虫の言い奴め」

アンダーソンはなおも顔をあげることはない。老人はそんな息子に一瞥をくれると、ノエルの方へと向き直つた。

「おい、小娘。お前さんからは何も言う事はないのか」

ノエルは何も言わず老人を見つめ返した。その様子に彼は情けないと言つた様子で首を横に振る。

「違う。それなりの考えはした」

「ほう」

「死にたくないかつただけ」

あまりにも単純な答えだつた。下手に勿体ぶる息子とは正反対なその物言いに、思わず老人は目を細めた。

「ここで匿うとしておもう長くはもたないぞ。既に協会は動き始めている」

「知つてる」

じつと2人は互いを見据えた。いや、老人は彼女の瞳に動搖が走ると思つていたのだ。しかし、既にノエルは最悪の場合の結末を受け入れているのか、そこに恐怖の色は映つていなかつた。

「当初は、私も政権が変わるとは思つていなかつた。選挙というのは通例化された一種の形式みたいなものだつたからな。だが、南米の奴らは政権を奪おうと各大陸の人間を見事に抱きこんでいた」

唐突に老人は昔語りを始めた。思わずアンダーソンも顔を上げて、父親の方を見る。

「もちろん歐州支部は当惑した。数百年と保たれていた地位が一瞬にして消え去つたんだからな。呆れる程に。幸い、私には財産も権力もあつたから、部下たちの面倒を見ることができたが」

「親父……」

「アンダーソン、協会は前政権と現政権の融和が狙いだ」

老人の眼はその年齢には見合わないほど鋭く光っていた。

「協会は先ほどある案を提示してきた。お前を助ける代わりに、私に協会へ戻れと」

アンダーソンはじわりと冷や汗が流れるのを感じた。それは簡単に言つてしまえば、自身に対する最終通告だ。彼は震える声で老人へと問い合わせた。

「仮に……仮にここで親父が協会の要求を無視した場合は……」

「私もお前も危険だな」

アンダーソンは目を見開いたまま、再び視線を床に落とした。しかし、老人はそんな息子の様子を視界の隅にやり、ノエルの方を見据えた。

「小娘、死にたくないと言つたな」

ノエルは力強く頷く。そんな少女の様子に満足いったのか、老人は適当に寛いでいいと言葉を残すと、二階へと姿を消した。

3、4階ほど上に登った頃だつたろうか。俺はいくら上がつても変わらぬフロア、忙しなく動く社員にそろそろ疲れを切らしていた。

「そういえば、リニア。秘密通路の目星は付いているのか」

「全然」

あつけらかんと答えるリニアに、俺も自然と顔が強張る。とりあえず上に行けばいいと進んできたが、もしかしたら既に秘密通路への道を通り過ぎている可能性があるからだ。

「どうするんだよ、俺はてつきりお前が何でも知つていそな雰囲気で前に進むから……」

「あ、じやあ先生に聞いてみる?」

自身が責められると分かつた瞬間、リニアは恩師の名前を出した。だが、確かにそれは妙案に違ひなかつたのだ。

「……確かに、先生なら知つていそうな気が」

俺の返事が早いか遅いか、あつという間にリニアは携帯電話を手にしていた。そして数回のコール音が聞こえたかと思うと、俺の耳にも微かに魔女の声が聞こえてきたのであつた。

「……そう、そこを行けば秘密通路に行けるわ」

そう言つて魔女は受話器を置いた。リニアと鈴木からの電話だつた。早く教えてほしかつたと愚痴を言われたが、何も聞かずに向かつた鈴木たちも悪いだらう。そう思いながら、魔女は再び作業に戻つた。

机の上にあるのは先日のテロ事件の書類だ。

「ロベルトは死亡と思われる。ベルコルは……おそらく行方不明か、或いは死亡か」

魔女は男の部分だけ流して、下の項目へと目をやつた。

ケラーは逃走、エドモンとゴトーは海外逃避及び行方不明。フーゴは協会側が捕えたと書かれていたが、その後ろには赤文字で協力という二文字が追加されていた。

「……急進派の人間が協会と協力した？」

研究所、それも急進派に属する人間からしたら協会の印象は最悪のはずだ。それが、処刑をまぬがれて、協力するというのはおかしな話である。魔女は眉を潜めて、書類を見直しだ。

フーゴが最後に戦つた人物はリニア・イベリンだ。リニア・イベリン……学問化された魔法を学ぶ事ができない例外的な人物の一人、協会内でも彼女の態度からして、目につくのは無理からぬことであり、その特異な体質は協会の研究対象の一つでもある。魔女は更に思考を巡らせた。

最近起きた事件。確かに、鈴木が狙われた事件もいくつかあるが、ハンス・ブリーゲルの帰国や今回のテロは彼とは関係がないのではないか。etcの文書とingの覚醒は別物ではないか。

「これは……ちょっと、面倒臭い事が起きそうね」

前回のテロでフーゴはリニアに接近した。そして、フーゴは現在日本支部で協力という形にいる。そして、その日本支部には鈴木とリニアが向かっている。
嫌な予感が走った直後、玄関で音がした。奏が帰つて來たのだ。

「ただいま」

「あ、あら。奏ちゃん、おかえりなさい」

「みんなは？」

「ちょっとと出かけてるわ」

奏はじつと魔女を見据えた。

「ほんとに？」

「本当よ、すぐに帰つてくるわ」

そう言いながら、魔女は机の上の書類をかたづけていた。

「確かに最初、違和感を感じたけど」

そう言いながら、俺とリニアはエレベーターに乗っていた。階数のボタンは地下1階が押してある。違和感はこれだつた、外から見た時このビルの高さに目を奪われて、上ばかりを見ていたが問題は地下にあつた。これだけの階層と人員がいながら、地下が一階しかないのは奇妙だ。

リニアは再び携帯の画面を開いた。魔女からのメールだ、そこには秘密通路までの道が載っているのだろう。俺は彼女の携帯を覗き見た。するとそこには、まるで格闘ゲームのコマンドのような記号が書いてあり、

「つまりボタンの押し方があるってことか?」

「そうみたい、ここを押して、次にこっちを……」

魔女の指示通りにボタンを押していくリニア。確かに、こんな複雑なシステムなら間違えて秘密通路に行く人間もいないだろう。やがて、全て押し終わつたのか、エレベーターがゆっくりと下降していった。

ゆっくりと――、ゆっくりと――、

「……俺たちが乗つたのつて4階からだよな?」

「そうだっけ?」

恍けるリニアだが、彼女も薄々気がついているのだろう、明らかに地下1階は通り越している。なんなら、10階分は下に降りている様な気すらする。そして、なおもエレベーターは下降し続けているのだ。

「あれじやない?地下1階の天井がとてつもなく高いとか――」

リニアがそう言つた瞬間、どうやらエレベーターは目的の階層に辿りついたらしい。リニアも腰を落として、その扉が開かれるのを待つた。

そして扉が開くと同時に、俺は「止まれ」と書かれた紙を投げる。しかし、何も反応はなかった。周囲の様子に目を配りながら、俺を先頭にして慎重にエレベーターから足を踏み

出した。

「……潜入成功か？」

「たぶん」

そうリニアが言つた瞬間、突然エレベーターの扉が閉まつた。そして、周囲から白煙が込み上げてくる。俺はすかさず後ろを振り返つたが、

「リニアニ

エレベーターは急激に下降していった。それはもうエレベーターの早さではなく、まるでロープが切れたかのように真っ逆さまに——。

「くそつ」

白煙が部屋に満ち、何も見えなくなる。俺は手持ちの装備を思い出し、懐から保護眼鏡とマスクを取り出した。意外にも換気扇は近くにあつたらしく、それをつけると白煙は徐々に辺りから姿を消していった。

俺はすぐにエレベーターの方へと引き返す。そして、真下の暗闇に向けて「開け」と書か

れた紙をつけたナイフを放つた。しかし、それは届いたのかどうかわからない。リニアなら何かしら、音を立てたりするはずなのだが、無音だ。

「けど、音がしなかつたということは……」

それはつまり、エレベーターが落下したわけではないということではないのか。俺はリニアの生存を楽観的に考え、少しでも早く階下に行くことにした。

改めて前へ向き直ると、そこはビルの中というよりは地下駐車場の様な簡素な作りをしていた。辺りはコンクリートむき出しの壁。いつどこから敵が飛び出してくるかもわからず、俺は常に警戒をして、足を進めて行つた。事実、俺は一対一の戦闘は不利だ。俺はサポート役でしか――、

「誰だ……」

未だ白煙が立ち込める中、前方に人影が見えた。だんだんと、その人物の顔が明らかになつていく。

男は無表情で俺を見つめていた。彼が何者かはわからないが、敵であるというのは確かだろう。

俺は静かに腰に手を伸ばした。戦闘態勢を取つておいて損はないだろう。

煙は殆ど消えていた。ただの目くらましだったのか、俺の体には特にこれといった症状は出ていない。一步、また一步、俺は男に近づいていった。すると、まるで置物なのかというほど、微動だにしなかつた男がやつと口を開いた。

「反対の方が釣れてしまつた」

「反対……ということは、お前の狙いはリニアだつたというわけか」

俺は敵の動きに最大限の注意を払いながら、口を開いた。

「お前は何者だ。ずっとここで待つていたのか」

「違う。俺はロベルトみたいに待たない」

「ロベルト……？ああ、聞いたことあるぞ。けど、奴は研究所の人間だつたはずだ。とい
うか、その口ぶりだと、まるで研究所の人間みたいだが？」

「そうだ」

男は迷うことなく肯定した。

「どういうことだ？俺の知つている限りじや、協会と研究所は絶対に相容れない仲のはずだ。それなのに何でお前のような研究所の人間が、協会の、しかもこんな重要な場所にいる。まさかお前も潜入したのか？」

「違う」

男は依然として一言、二言しか呴かない。俺は早く片付けてしまおうと、腰を落として走り出そうとした。その瞬間だった。目の前の男が重たそうな上体を僅かに曲げる。

「ああ、そうだ。俺の目的は改造人間なんかではない。俺の研究に必要なのは、リニア・イベリンだ。だが、俺はリニア・イベリンを取り逃がしてしまった」

一人でぶつぶつと呴いている男。どうやら、武器という武器は持っていない様に思われる。ならば、素手か、あるいは何か特別な能力でも持ち合わせているのだろうか。少なくとも、俺は相手との間にある程度の間隔が必要だと悟つた。距離が開けば聞くほど、俺の攻撃もやりやすくなる。

徐々に後退する俺に気付いたのか、男はふと顔を上げて俺を見据えた。

「フーゴ・ベルだ」

自己紹介のつもりだろうか、相手はじっと俺の反応を待つてているようだつた。

「俺はただの平凡な大学生だ」

そう名乗り終ると、すかさず俺はナイフを投げた。瞬間、閃光が走る。俺は「爆発」と書かれた紙をナイフにつけていたからだ。

ある意味隙をついたはずの攻撃だったが、男——フーゴはいとも簡単にその爆発から逃れた。鉄骨の裏に隠れた彼は、俺の攻撃が終わるとわかるや否や、急激に俺に接近し始めた。

「くそっ」

俺もすぐにそれに対応して、ボウガンを構える。だが、俺の矢は虚しくも男の体を捕える事が出来ない。問題は俺の装備にあつた。前回の戦闘よりも多くのものを忍ばせているため、明らかに動きが遅れている。

俺は迫りくる相手に向かい、ナイフを飛ばした。少なくとも、敵の動きを止めて距離を稼がなくてはならなかつたが——、

「このような手はもう通じないよ、鈴木聰太」

男はまるで俺の手の内が分かつてゐるかのように、体を大きく翻した。その華麗な跳躍に思わず見入ってしまう程だ。

「ナイフを用いた戦闘は既に攻略済みだ。君の戦法も協会内では知れ渡つてゐる。そして君は、「対1の戦いでは不利だ。よつてこの戦いは君の敗北に終わる」

落ち着いた声が響き渡る。何か不気味なものが、喉元からせり上がりてくるようだつた。俺は殆ど無意識のまま、走り出していた。

気づくと エレベーターは俺の背中のはるか遠くにあつた。

『連絡は明日でもいいと言つたはずだが……まあ、返答が早い分には有り難いな』

モニター上に映る男はそつと笑みを浮かべている。対する、老人——ジエームズ・カイルの方は、何も言わずにじつとモニターを見つめていた。

『ジエームズ、準備は既にできている。あなたの復帰を拒む連中も取り除いておいた。あなたはただ以前と同じように行動して頂ければ——』

「昔と今は違う。以前と同じような方針を掲げていると、いずれ崩壊するぞ」

そう言いながら、老人は机の脇に置いてあつた酒瓶をグラスへと注いだ。血の色の様に赤い液体がまるで今後の彼自身の運命を定めかねているかのように、グラスの中で揺れている。モニター上の男は、しばらくそれが注ぎ終わるまで見届けると、

『……だが、古株連中を鼓舞するにはあなたの存在は大きい』

「断る」

『はい?』

「断ると言つたんだ、アルゼンチン」

ギロりと、老人の目が男へと向けられる。するとその視線を受けた男は、躊躇いや戸惑い、

落胆といった表情を見せるでもなく、薄暗い室内にくつきりと浮かぶ、その白い歯を見せて笑つた。

『……………』

「確かに私が復帰したならば、旧政権の連中は、辞めていつたものも含め私の下に集まつてくるだろう。だが、君の目的は別にある。それに、息子を人質に取るような男の言葉を信用する気にはならん。大体、君は初めから我々が断ると仮定してから動いているな。おそらく既に君たちの皆殺しリストに俺の名も書いてある事だろう。その下には金色の魔女の名前もな」

男の口から徐々に笑みが消えて行く。老人はそんな彼の様子に構うことなく、一気にグラスを呷ると再び口を開いた。

「見苦しいな。十年以上も見てきたはずだが、アルゼンチン。我々の目的は現状維持だろう、余計な事をするな」

唐突に声を上げて笑い始めた男は、傍に控えている従者に同意を求めるべく、先ほど以上に満面な笑みを老人へと向けた。

『ジエームズ、今のあなたには何もない。そして今の私は全てを持っている。つまり初めから決定権は私にあるんだよ』

「そうか」

そういうふうと、老人は静かに瞳を閉じた。

「……それは、狂っているな」

言い終わるや否や、老人は手にしていたグラスをモニターに向けて勢いよく投げつけた。案の定、バリーンッと尖った音が室内に響き渡る。

「……」

そして彼は強張っていた肩を落とすと、椅子に背を預け、何の気も無しに締め切つたドアに向かつて声をかけた。

「そこで何をしている」

扉の向うの人物——ノエルは突然、自身に投げかけられたと思しき言葉に、思わず体が固まってしまった。まるで誰もいないかのように気配を消そうとしていたが、時既に遅し。扉越しから、すぐそこで衣擦れの音が聞こえてきた。ノエルと老人の間には、もはや扉一枚しかない。

がちやりという小気味良い音と共に扉が開いた。思わず後ずさるノエルに対し、老人はまるで手招きするかのよう、何も言わずに彼女に背を向けた。

「今の話、聞いていたのか」

「あ……うん……」

「……別に叱るつもりはない」

老人は彼女の様子を気にすることもなく、再び椅子へと戻った。ノエルは若干の緊張を覚えながらも部屋の中に足を踏み入れ、そつと後ろ手で扉を閉めた。書斎にしては、随分と広い造りをしており、老人ひとりには充分すぎるくらいだとノエルは思った。

そして何より、部屋に入つて真つ先に彼女の視線を捉えたのが、老人の目の前に置かれている無残にもガラスが飛び散ったモニターだ。彼女が廊下で聞いた音の発生源である。

しばらくの間、彼らは何も言わずにいた。互いに目を合わせることもない。やがて老人はため息をつくと、近くにあつた箒と散りとりを手にし、自身が壊したモニターの後処理を始めた。最後に掃除機をかける当たり、几帳面な人柄なのだろう。ノエルはじつとその光景を見ているだけだった。

やがて掃除を終え、老人は再び椅子に深く座り直すとやつとノエルへと顔を向けた。

「そういえば自己紹介がまだだつたな。ジエームズ・カイルだ。アンダーソンの父親だ。以前は協会で仕事をしていたが今はただの年寄りにすぎない」

ぶつきらぼうに自身について述べる老人。彼の自己紹介に答えるようにノエルも一步前に出た。そして、淑女のようにスカートの裾を持ち上げると、

「ノエル。……前は研究所にいた」

「自分の意志で来たのか」

一瞬、ノエルは彼の質問の意図が汲めなかつたが、すぐに彼女は先ほどの居間での会話を思い出した。しかし、それでも彼女は「どう答えればいいのかよくわからない」といつた風に曖昧に首を傾げるしかない。

「この家に来るという選択しかなかつたということか。私と同じだな、勝手に家に上がりこまれたかと思つたら、あつという間に隠れ家にされてしまつた」

その言葉に思わずノエルは立ちあがると、老人に向かつて声を荒げた。

「あいつらが私を勝手にここに連れてきたんだ! それに私だつて自分なりに考えた!」

「どこに連れて行かれるかもわからずについてきたと? アンダーソンがそのまま協会に連れて行くという可能性は考えなかつたのか」

「それは……どうせ私には帰る場所なんてなかつたし……私が気に入らないなら追い出せばいいじやない!」

ノエルは拳を固く握りしめて老人へと怒鳴つた。しかし、一瞬の後、彼女は自身の行動を省みて急に恥かしさでいっぱいになる。事実、彼女の精神は未だ子供のままだ。感情の抑制が上手くできないのである。それをノエル自身が誰よりも感じていたのだ。

「……前に、部長……私の上司の人が言つていた。自分の目的はetcの文書とingだが、研究所自体はリニア・イベリンを注視している、そして協会も同じようにリニア・イベリンを特別視しているつて」

「リニア・イベリン?」

老人の訝しげな声に、ノエルが顔を上げると、彼は先ほどとは一変して、その顔は血の気ない真っ青な表情をしていた。口元に手を当て、まるで何かの糸を手繰り寄せるかのように。もはや彼の瞳にはノエルは映つていなかつた。突然の変化にノエルも僅かながら恐怖を覚え、一歩、また一歩後ろへと下がつていると、

ガタツ

ソファの端にノエルの足が当たつた。静寂な室内に響く音。おかげで、老人の意識は現実へと引き戻されたようだ。再び、彼らは無言で対峙した。

「……私が何かおかしなことでも言つたのか?」

「いや……だがしかし、そうか。ベルコルが行方不明になつた先日の事件から色々とこじれできているようだな」

ノエルには到底理解できないような事をひとり呟く老人。彼女は不機嫌そうに廊下へ踵を返そっとしたところ、

「……飯は食べたのか?」

唐突に投げかけられた言葉に、彼女の体は思い出したかのように空腹を訴え始めた。

「……しらない」

ノエルは拗ねたように首を横に振る。

「作つてやる」

「え」

「（う）飯を作つてやると言つたんだ。それと、息子はどこにいる」

「……まだ一階にいる」

「そ、う、か」

そういうと、老人は扉の前に立ちつくした彼女の前を横切つた。呆然とその様子を見ていたが、しばらくしてノエルもぎこちない足取りでその背中を追つていった。

この屋敷の台所に行くためには、必ず先ほどの居間を通らなければならず、アンダーソンとすれ違うのは必然だった。

「『飯食べるか』

「ええ」

二つ返事で会話をこなすあたり、さすが親子というべきか。老人は立ち止まることなく、彼の傍を通り過ぎて行つた。その後をノエルが追う。奇妙な光景に、思わずアンダーソンも一瞥をくれたが、すぐに彼は手元の書類へと目を戻した。

台所に立つののは手慣れているのだろう、老人はすぐさま調理へと取り掛かった。何故か彼の隣にはノエルが助手の様に立つている。

「……玉ねぎとつてくれ」

「はい」

「にんじん」

「はい」

材料を手渡すだけという単純な作業だが、それでもノエルにとつてはどこか誇らしい気分だつた。老人は黙々と材料を切り刻んでいく。手際良く手を動かしていく中、ふと、老人が口を開いた。

「お前さんは知つてるか知らんが、協会には悪い奴らがたくさんいるぞ」

「じゃあ、そんな悪い奴らと一緒にいたおじさんは？」

「どうだかな。俺の家は先祖代々協会に勤めている、自分が協会にいるというのが当然だつたからな。善惡を考えることすらしていなかつたのかもしれない。命令に逆らえれば死、無駄死にするのが御免だつただけだ」

ノエルはじつと老人の顔を見つめていた。しかし、彼はそんなノエルの視線に答えることなく、目の前の食材を見つめたまま話を続けた。

「そのまま年を取つていつたら、突然政権が変わるという。俺は迷うことなく都落ちを選んだ。息子も協会内で腕が立つてきたから、そろそろ潮時だと思つてな。まさかその息子がここに逃げ伸びてくるとは思わなかつたが」

気づくと、老人の瞳はぐつぐつと煮え立つた鍋を見ていた。おそらく今のは単なる気まぐれ、ひとりごとのようなものだつたのだろう。彼はふつと小さく息を零すと再び調理に戻つた。

＊

「……何ですか、これは」

「鍋だ」

アンダーソンは啞然とした様子で出てきた料理を見下ろしていた。鍋だと言い張る老人は、当たり前の様に取り皿を持つてくる。

「いつから日本食を作るようになつたんですか……」

「年寄りの胃袋にはこういうものがちょうどいいんだ」

そう言つて机の真ん中に置かれた鍋を、三人は取り囲んだ。誰ひとり、何の話題も出さず、ただ黙々と食事を始める。ぐつぐつと煮える心地よい音だけが室内には響き渡つていた。

夕食後。

キイツ

古臭い建物の音を立てて、ジエームズ・カイルは自身の部屋の扉を開けた。そして迷うことなく一直線に、彼は奥の衣装箪笥の戸を引いた。若い頃、研究所との戦闘時に必ずといつていいくほど着こんでいた服だ。ネクタイまでしつかりと絞めると、彼は鏡の前で確認する。その後、ジエームズは自身の机へと近づいた。引き出しの一番上に入っている二丁の古い拳銃——それを取り出すと、彼は弾丸を確認し、懐へとしまった。

——準備は整つた。

ジエームズは部屋の明かりを消し、自身の部屋を後にした。廊下の途中で居間にちらりと視線を向ける。ノエルは横になっていたが、アンダーソンの姿は見えなかつた。しかし、彼は構わず玄関へと足を進める。

「親父」

声の主が誰かはすぐにわかつた。ゆっくりとジエームズが後ろを振り返る。彼の予想通り、そこにはアンダーソンが廊下に立ちつくしていた。

「……とつと横になりなさい。私は庭の手入れをしなければならない」

「父さん、協会の連中に会いに行くつもりですね」

しんと静まり返る廊下。奥の部屋から時計の音が僅かに聞こえるばかりだ。やがて、ジエームズが呆れたようにため息を零した。

「お前にそんなふうに呼ばれたのは随分と久しぶりだな」

「父さん……俺も一緒に……」

アンダーソンが言い終わる前に、ジエームズの体が動いた。月光に反射して、何かがきら

りと宙を舞う。アンダーソンは反射的にそれに手を伸ばした。

「これは？」

彼の手元に飛んできたのは小さなネクタイピンだつた。かなりの年季が入つており、お世辞にも綺麗とは言えない代物である。ジエームズは、どこか寂しげな様子でそれが何かを告げた。

「お前の母さんが、若い頃私にくれたものだ」

「母さんが……」

思わず、アンダーソンは自身の手元をじつと見据えた。何故今それを自分に渡すのか、そして亡くなつた母親の大変な形見。色々な感情がアンダーソンの中で生まれていく。彼はどういう反応をすればいいのかわからなまま、ただそれらの感情を受け入れていくかのよう、ゆっくりと、優しくそれを握りしめた。

「研究所の連中に思うところがあるだろう……だが、今やつているお前の行動は、そりだな。俺は誇らしいと思つてゐる」

そう告げると、ジエームズは再びアンダーソンに背を向けた。

「あの娘ちゃんはまだまだ幼い。ちゃんと面倒見てやれ。あの娘ちゃんも、そのネクタイピンも大切にしろよ」

「父さん……駄目です、待つて下さい。いくらあなたでも一人では到底無理です」

いつのまにか、アンダーソンの瞳は濡れていた。目の前の父親を必死に止めたいという想いと、彼の想いを裏切るわけにはいかない、そんな2つの想いに板挟みになりながら、彼は涙を流すしかなかつたのだ。

「じゃあな」

ジエームズは振り返ることなく、片手を上げて去つていった。それはまるで、幼い頃幾度となく見送つた、仕事に向かう父親の背中の様で。

アンダーソンは扉が閉まるまで、じつとその大きな背中を見つめていた。

「いやー、危なかつた」

リニア・イベリンは先ほどまでの自身の状況を振り返り、何度も目かの安堵の息を零した。エレベーターが墜落する直前、彼女は間一髪のところで天井を蹴り破り、傍にあつた簡易梯子で難を逃れたのであつた。

そして近くの階と思しき場所の扉目がけて、渾身の蹴りと共に室内に転がり込んできたというわけである。

「聰太のいる階の下、いや、もう一つ下くらいかな」

再び彼女はエレベーターの方へと引き返した。そして簡易はしごで上を目指してひたすら登っていく。やがて、室内から異様な白い煙が漏れ出している階があつた。彼女は迷うことなく、扉を蹴破る準備をはじめた。一瞬の後、リニアは思い切り体を宙に放りだす。そしてその勢いのまま、彼女の体は室内へと突入した。

「……なにこれ」

室内に充满している白い煙。壊れかけたコンクリートの数々、照明は心もとないほどの明るさだ。加えて、あちこちにつけられたナイフの跡が生々しい。戦闘状況が全く分からなくな

いまま、リニアは室内に目を凝らした。

——誰かいる。

微妙に視界の端に影が通つた。

「聰太三」

そしてリニアはもうひとつ影も捕える。急いで応援に向かおうした最中、目の前で大きな音と共に何かが崩れた。只でさえ煙が充満する中、明かりも暗い。彼女は必死に目を凝らして、その場所へと向かつた。

「つと、駄目だ。冷静にならないと……まずは周囲の状況を」

そう言つて、彼女は懐から紙を取り出した。書いてある文字は“光”。次の瞬間、閃光が彼女の周囲を灯した。それと同時に、リニアは自身の下唇をきつく噛みしめた。一瞬の明りだつたが、それで充分と言うほどに、彼女は現在の自身の状況を思い知らされたのだった。コンクリートの影から漏れだす幾人もの影。彼らは一様にして、何かを手にしていた。おそらく拳銃だろう。そう、彼女は既に完全包囲されていたのだ。

「これは……絶体絶命ってやつかな」

「何だ？」

突然、後ろの方で閃光が上がった気がした。俺はちらりと視界の端に映つたそれを見逃さなかつた。

——電気が爆発したのか？いや、それなら爆発音もするはずだ。魔法か？誰かが魔法を使用した……？一体誰だ、リニアか？それとも協会の増援か？……いや、あれは。

俺は立ち止まって後ろを振り返つた。予想通り、男は俺に合わせて立ち止まる。すつと、俺は左手に巻かれたワイヤーを解いた。

「Chaserの遺品か、やつと本気を出してくれるわけか」

「さつきから本気のつもりだよ」

冷や汗が落ちる。それでも、先ほどよりは体が軽くなつた気がする。リニアが無事だ。數十メートル先でリニアも戦つてゐる、ただそれだけで俺の中には希望が生まれていたのだ。俺は腰を落として、相手との距離を慎重に把握する。右手にはナイフ、左手にはワイヤー、攻撃する順番は既に決めていた。

「よしつ……」

ナイフを投げる。鋭い音と共に、刃先が飛んでいく。相手に刺さるかは重要ではなかつた。ただ魔法の効果が発揮される範囲内に届けばいい。

「遅い」

男は文字の効果が発揮される範囲外に、すばやく身を翻した。

「随分と身軽だな」

なんとか平静を保とうするが、駄目だ。内心の焦りが収まらない。残りのナイフは残り一本。回収しにいけば、手持ちが増えるがその倍リスクは上がる。

「くそつ」

最後の一本、一縷の望みをかけて放つ。

しかし、それも難なく男に躊躇してしまった。すかさず、俺はワイヤーを男に向けて放つが、逆に彼はそれを利用して、一気に俺の目の前まで迫ると、重たい一撃を腹部へと打ちこんだ。

「うつ」

衝撃と共に後ろに吹き飛ぶ中、俺は必死でワイヤーを手元へ引き戻した。

「……接近戦は向いてないだろ、馬鹿」

俺は確実に焦っていた。ひとりで愚痴を零しながら、再び顔をあげる。男は先ほど俺が外したナイフを手にしていた。そしてゆっくりと、俺に向かつて歩いてくる。

「あれに刺されたら終わりだな」

乾いた笑みが俺の口元からこぼれた。

——それでも、ここで負けるわけにはいかないんだ。

先ほどの衝撃で全身の神経がおかしくなったかのように、しびれている。対する俺の脳は、必死に策を考え始めていた。一步ずつ、死が迫りくる中、俺は右足へと手を伸ばした。そして何のためらいもなく、勢いよく取り出したクロスボウを男に向けて放つた。

命中——とはいからずとも、それは男の態勢を崩すには充分だった。クロスボウの矢につけられた紙“止まれ”の効果がすかさず発揮される。すぐに俺は懷から一枚の紙を取り出して、勢いよくそれを投げつけた。

「『爆発』三

「つ……三」

終わりは一瞬だった。“止まれ”という効果が発揮された中、男は指一本動かす事も出来ず爆発に巻き込まれた。正確には、彼の少し手前での爆発であり、建物の倒壊に巻き込まれただけだが。

「鈴木……聰太……三」

126.psd

男の足元は、爆発によつて壊れたコンクリートの柱に巻き込まれていた。しかし、上半身はまだ動く様で、俺はその一瞬に油断した。鈍い音が自身の左腕から聞こえた。それと同時に、激しい痛みが押し寄せてくる。

「しまつた……」

彼が手にしていたナイフは見事な命中率で俺の左腕を貫いていた。

「まだまだ終わらないぞ、鈴木聰太……」

「はつ……その辺にしといた方がいいんじやないか」

既に大量の血液が流れているのは明らかだつた。だが、男は俺の言葉を無視して必死に瓦礫の山から抜け出す。

「俺の目的は……まだ……俺の目的は、リニア・イベリンだ」

外は生憎の天気だな。ジェームズはそう思いながら、庭へと足を進めた。ここに入口はひとつ。向こうの方で顔なじみの服を着た男が雨の中、傘も持たずに行んでいた。

「……お前か」

何度か見かけた事がある程度の男だ、ジェームズはハンス・ブリーゲルが派遣されなかつたことに、内心協会へ感謝をした。

しとしとと降り注ぐ雨が、次第にジェームズの体を濡らしていく。彼は今一度、自身の懐の物を確認した。

「お元気そうですね、ジェームズ・カイルさん」

「ああ、相変わらず忙しそうだな」

そう言つて、ジェームズは目の前の男——日本支部内でもそれなりに名が知られている男、柳公平を見据えた。彼の隣には部下と思しき数人の男が立つてゐる。

「建物内に人は？」

「使用人なら誰もいない」

「なるほど……けど、まあこれも仕事なんで」

氣だるそうにしながら、柳はゆっくりと屋敷の方へと入っていく。彼の後ろには男たちがぞろぞろと続いていた。柳とジエームズの距離が徐々に縮まつていく。だが、しばらくして柳はその足をぴたりと止めた。

「……何の真似ですか」

柳の視線の先には、こちらに銃口を向けるジエームズがいた。彼は何も言わない、だがその行為が「これ以上、足を踏み入れるな」と言っているようだつた。

「日本には銃刀法っていう法律があるんですよ」

ジエームズは何も反応を見せない、既に何かを決意しているようだ。

「ジエームズさん、あなたもわかつてていると思いますけど、初めからそちらに拒否権なんてないんですよ」

「いいや、権利はある。ここは私の家だ。不法侵入罪は充分に成立する」

ジエームズは一層、引き金にかける指に力を入れた。控えていた男たちにも緊張が走る。しかし、柳だけは一心にその銃口を見つめていた。

「聞いた話では、リニア・イベリンの真実が漏洩したらしいじゃないか。それにリニア・イベリンと鈴木聰太が日本支部で暴れていますからね。君たちも応援に行つた方がいいんじゃないか？」

「ふう……」

柳はため息をつくと、やれやれといった様子で煙草を取り出した。そして味わうようにして吸つた最初の一息を吐くと、

「そのことなら、既に協会長も御存じです」

「何……？なら奴は、研究所がその眞実に触れる事を黙認したという事か？まさか、協会は研究所の人間と手を組んでいるのか？」

「……ジエームズさん、そこをどいて頂けますか」

柳は一気に残りを吸い終わると、煙草を地面に吐き捨てた。話はもう終わりというわけか、そう思つたジエームズは懐からもう一つの拳銃を取り出した。それを見た柳は、すぐに周囲に合図を送つた。瞬間の後、柳の周りにいた男たちはジエームズ目がけて走り出していた。

ジエームズもすかさず距離を取つて、ひとりひとりに照準を合わせていく。

足、腕、見事に相手の体を貫いていくが、彼の体は明らかに衰えていた。撃つた時の反動が体中を駆け巡る、おまけに体の動きも目の前の男連中に比べて幾分遅れを取つていた。ナイフで襲いかかる者、拳銃を構える者、ジエームズは全身の筋肉を強張らせて、一瞬たりとも彼らの動きを見逃さなかつた。

「いやー、さすがですね。その年になつてもびっくりする位の瞬発力に、拳銃の腕だ。さつきから彼らの足を的確に撃ち抜いている」

柳は改めて、地面に倒れ伏している男たちを見回した。

「ある意味、彼らも運がよかつたというのか。おかげでみんな命拾いしました」

そういうて、僅かに笑みを浮かべる柳だつたが、ついに彼がジエームズの元へと歩き始め

た。

「ジエームズさん、この辺にしどきましょう。人數差的に勝機はまずないですよ、おまけにこの有様。これ以上はさすがに私も動かざるを得なくなります」

「笑わせるな、最初から君たちは俺を殺しに来たんだろ」

ジエームズは大きく肩を上下させて、柳を見据えた。

「研究所の人間と協力するとは……協会の目的は現状維持だが、それと同時に研究所を壊滅させる事でもあるはずだ。柳くん、君にはそれくらいの分別を弁える頭があると思っていたがね」

「そうですね……ですが、私には家庭があるんですよ」

「はつ……くだらん」

ジエームズは再び拳銃を構える。

ふと、遠くの稻光が柳の表情を鮮明に見せた。いつにもまして、氣だるそうな顔だ。その頬を雨粒がゆっくりと伝つていく。

133.psd

そして、それが地面に落ちる瞬間——、気づくと、ジェームズの体は地面に伏していた。

「くつ……ああああ三」

足から強烈な痛みが登つてくる。やがて痛みはジェームズの体中へと行きわたり、まるで燃えているかのように、全身に熱が広がり始めた。

一方の柳は涼しげな様子でため息をつくと、傍の茂みへと目をやつた。木々に紛れるように男がひとり、その手には古い拳銃が微かに消炎を立ち昇らせていた。

「貴様つ……」

ジェームズは真っ赤な血が流れる左足を抑えながら、必死に体を起こした。そしてすぐに周囲の茂みを確認する。

「狙撃手か……」

「あなたにとつては下らないかもしませんが、家族を侮辱されるのは許せないんですよ」

柳は周囲の人間に向けて合図を送った。撃たれたものを除き、残りの男たちが一齊に邸宅へと足を踏み入れる。ジエームズはなんとか彼らを止めようと試みるも、老いた彼の体ではもはや止める術は無かつた。何より、彼の前には未だ立ち尽くす男がいる。

「私の記憶が正しければ、以前あなたは妻と同じ所で死にたいと言つてましたよね」

柳は新たに煙草を取り出した。そして濡れ鼠の様に垂れた前髪の間から、鋭い眼光がジエームズへと向けられる。

「どうします？ それでいくと、あなたの死に場所はここになりますけど」

「はっ……構わんさ」

「ふう……」

リニアは流れ落ちる汗を拭い、一息をついた。

取り囲んでいた連中は協会の人間だった。しかし、彼らはおそらくサラリーマン同等の力。実戦に投入されたこともない連中だつたのだろう。おかげでリニアは傷一つ受けることがなく、あつという間に彼らを制圧してしまつた。

「そうだ、何か使えるもの持つてないかな」

リニアは近くに倒れていた男の懐を探る事にした。彼女が望むものは、この薄暗い室内を照らす事のできるものだ。しばらくして、彼女が見つけた物はライターと懐中電灯だつた。

「よし、これなら大丈夫でしょ」

そう言つて、意気揚々とリニアは走り出した。

「相手がどんな奴かはわからないけど、肉弾戦は聰太に不利だわ。早く追いついて、二対一の短期戦に持ち込まないと」

リニアは先ほど大きな音がした場所に辿りつくと、周囲を見回した。既に戦闘は終わつたのか、誰ひとり気配がない。彼女は近くに落ちていたナイフを拾いあげた。

「もっと奥の方かな……」

そう言つて、再びリニアは走り出す。心の中には不安が溢れていた。それでも、何とか冷静さを失わないよう必死だつた。いや、一心不乱に走る事によつて彼女はその不安から目をそむけていただけなのかもしれない。

「起きる三

アンダーソンは大声で、ソファで眠りこけている少女に呼びかけた。びっくりした様子で、起き上がる彼女にかまうことなく、彼はその小さな腕を引っ張る。

「い、痛いどこ行くの」

「脱出だ」

「え？ どうして」

アンダーソンは何も言わずに全力で走りだした。この家の門はひとつしかない。だが、それとは別に地下を利用した秘密通路がこの家には用意されていた。ノエルは訳も分からず、ただただ彼に手を引かれて走り続けるしかなかつたのだ。

そもそもアンダーソンがこの家に来たのには二つの考えがあつたからだ。

ひとつは、自身の父親までが今回の計画に賛成を示していたならば、それは本当に協会が、旧政権と新政権が完全に一つになつたということ。つまり新政権の考えが正しいという証明になつてしまふ。おそらく改造人間を連れてこいという命令も自分たちの利益のためだろう。ノエルは金色の魔女、リニア・イベルインたちと関わっている。彼らの重要な情報を握つていると思われているに違ひなかつた。

そして二つ目は、日本に派遣されたアンダーソンに万が一のこと�이訪れたとして、欧洲からの支援はほぼゼロに近い。はじめから、彼がこの作戦を断つたとしても、計画自体は成功すると約束されているようなものだつた。それ故、少しでも助力を望めればよかつたのだが。

「不穏分子は悉く一掃するというわけか」

走りながら、アンダーソンは思いつきり奥歯を噛みしめた。

——何で親父は新政権の誘いを断つた。誇りか？忠義か？自分の命を危険にさらしてまで？

「くつそおおお三」

「ちょっと待つて……何で私たちだけなの？あのじじいは？」

「うるせえ！」

「放して！」

ノエルは必死に抵抗した。彼女の体は改造人間だ、故にアンダーソンがいくら力を込めても、本気で力を込めた彼女の体にはビクともしなかった。

「何も言わずに……ついてこい！」

アンダーソンは絞り出すような声で、彼女の腕をより一層強く握りしめた。彼の頭は下を向いている。それでも、子供の身長からは彼の表情がはつきりと見えてしまった。

「……じじいは」

「……わからん。とりあえず、今は脱出だ」

ノエルは無言で領き返した。今度こそ、2人は走り出す。既に廊下を抜け、地下通路に出ていた。後は、邸宅の出口とは反対方向の地上に出れば――、

「しまつた……!!」

思わずアンダーソンの口について出た言葉は、この場が最悪の状況下にあることを示していた。

奥に数人の男が見える、服装からして協会の肅清部隊に違いない。前にも敵、後ろにも敵が迫っている。

しかし、アンダーソンたちは敵が目の前にいるからといって後戻りをすることはない。ノエルはすかさず鞄から拳銃を取り出し、

バンツ

鋭い銃声が響いた。アンダーソンは思わず立ち止まり、すぐ隣の少女を見るが、彼女の顔

には困惑の色が浮かんでいる。

「違う……私じゃない……」

その言葉に、アンダーソンも訳が分からぬといつた状況だつた。銃声は彼らのすぐ近くで聞こえた。そして弾丸は、アンダーソンの足元。あと一步でも前に出ていたら、見事に銃弾をお見舞いされていたところだつただろう。

「……ここまでか」

今の銃弾はこれ以上動いたら、次はないという意味に違ひない。ぞろぞろと、肅清部隊が姿を現していく。やがて、煙草をくわえた男が顔を出した。その後ろには数人の男が何かを引きずつてゐる。

「あれは……」

「親父……」

思わず息を飲むアンダーソンとノエル。彼らの視線の先には、ぐつたりとした様子のジエームズの姿があつた。所々から出血をしており、その出血量から見ておそらくもう息はしていないので、アンダーソンはすぐに悟つた。

「久しぶりだな」

目の前の男は、不機嫌そうに声をかけてきた。

「何で命令に背いた？ 改造人間ひとりのためにこんな騒ぎまで起こして……」

「柳……公平……!!」

アンダーソンは怒りのあまり真っ赤になつた顔で、柳を睨み返した。

柳は淡々とした表情で2人を見据えていた。

「アンダーソン・カイル、最終通告だ。その改造人間を渡せ」

アンダーソンは何も答えることなく、ただじつと柳の方を見ていた。父親に対する仕打ち、今すぐにでも彼は目の前の男に掴みかかりたいくらいだった。柳もその殺意をはつきりと

感じているのだろう、冷ややかな視線でアンダーソンを見下ろしている。

「もう一度言う、その改造人間を渡せ」

「……ははつ、これは驚きだな。俺ひとりを処理するため、アンタを導入するなんて。というか、こういう汚れ仕事とは縁を切ったんじやなかつたのか？」

「もちろん妻と子供には内密だ。それよりもそろそろ降参してくれないか？ 悪いけど、君たちにはもう……いや、初めから勝ち目はないよ」

「まあ、元々俺はブラックリストに載っていたのかもしれないな。あまりにも多くの事を知り過ぎてしまつたつてやつ……けど、俺の次はアンタじやないか、柳公平」

「ふむ。そうだろうね。けど、まあ私は従順な部下で通つてるし。というか、協会もそんな無暗に殺しはしないよ。今回の件だつて、君が大人しく命令に従つていればこんなことにもならなかつた」

「そうかもしれないが、どうもこれは俺のスタイルじやない」

その言葉を聞き、柳はふうと煙を吐き出した。立ち上る紫煙がやけに彼の表情を曇らせている。

「スタイル……ねえ。だが、君の父親はそのスタイルとやらのせいで死んだ」

「それが親父の結論だ、誰も後悔することはない」

「そうか……残念だな、アンダーソン・カイル。君もここまでのことだ」

柳の部下たちが一斉に拳銃を構える。思わず、アンダーソンはノエルの腕をきつく掴んだ。そして僅かに背を丸めると、小さな声で少女の耳元へ語りかけた。

「いいか、金色の魔女はお前を見捨てたりしない。ノエル、生き残れよ」

「はあ[る]こまで連れてきといて……何よ、それ」

「悪いな。俺が撃たれた瞬間、一気にここを駆け抜ける。お前の身体能力なら大丈夫だ」

「ふ、ふざけんな!」

声を荒げるノエルを無視して、アンダーソンは一步前に出た。

「柳公平、どうせならアンタが撃つてくれ。見ず知らずの連中に殺されるよりはいい」

「……なるほど」

柳は周囲の連中に構えを解かせると、自らの拳銃を懐から取り出した。そしてゆっくりと、アンダーソンの額に照準を合わせる。

次の瞬間――、

『……ではいけない……命は……なものだ』

「誰だ?」

突然、地下通路に謎の声が響き渡つた。アンダーソンはもちろん、柳も周囲に目を配り始める。

『命をそんな風に投げ出すとは。そんなものでは何も変化は生まれない』

柳は拳銃をアンダーソンへと向けたまま、声の主に問い合わせた。

「何者だ、顔を出せ」

『それはできない相談だ。私の特技は顔を見せずに仕事を遂行することだ』
いつのまにか、ノエルの体は小刻みに震えていた。彼女にはこの声の主が誰かわかつていたのだ。

「まあ、今はどうでもいい。こっちが先だ、アンダーソン。これでお別れだ」

柳の指が動いた。

響き渡る銃声。確かに弾丸は出た。しかし、次の瞬間、弾丸はまっすぐとアンダーソンの額へ向かって飛んだ——のではなく、全く別の方向へと飛んでいった。

「な……」

思わず柳は自身の拳銃を調べる。だが異常は全く見受けられなかつた。それと引き換えに、異常なのは拳銃ではなく、この空間そのものだという事に気がついたのだった。

振り返ると、先ほどまで列をなしていた彼の部下は皆、地面に倒れ伏しており、狙撃手たちも全て行動不能という状況に陥っている。

「これは一体どういうことだ」

柳は何もない空間を見つめていた。すると突然、その何もない空間からなにかが飛び出してきた。人だ。ノエルはその顔を見て、思わず叫び声をあげそうになる。

「……ケラー？」

「エドモンの頼みだ」

ノエルはもちろん、アンダーソンと柳も突然現れ出た人物に目を奪われていた。そんなアンダーソンを、ケラーは一瞥すると、

「金色の魔女とエドモンとの間に会談があつた。フーゴが協会と一緒になつて、自身の研究を終わらせると聞いて彼らは手を取つたそうだ。互いに利益が一致したんだろう」

手短に説明を終えたケラーは、すつと柳に目を向けた。

「続けるのか？君が負けるのは目に見えているけど」

柳は最後の一本である煙草を取り出した。そして火をつけると、拳銃を仕舞い直した。

「やめやめ、こんな閉鎖的な空間で勝ち目もないし、悪戯に催眠術にかかるのも疲れるだけだ」

「賢明な選択だな」

「これからどう動くつもりだ」

「日本支部に行くつもりだ、移動手段は既に整っている。君にも同行してもらうよ、柳公平」

「はいはい、わかりましたよ」

柳は仕方ないといった様子で首を縦に振る。しばらくすると、出口の方からプロペラ音が聞こえてきた。

「おい、お前。ずっと見ていたんだろう。何故、親父を助けなかつた」

アンダーソンは出口へと向かうケラーの背中をきつく睨んだ。彼の能力があれば、一人くらいは容易に救出できるはずである。悔しさと怒りを混ぜ込んだような想いで、彼はケラーの返答を待つた。しかし、一方のケラーは彼のそんな思いを知つてか知らずか平然とした様子で、

「そんな義理はない。私が受けた命令は、改造人間を協会の手に渡すなどということだけだ。もつと言ふと、君の父親は助けなど望んではいなかつた」

「それでも……ケラー、今回の件、絶対に忘れないからな……」

ケラーはアンダーソンの視線を受け流すと、すぐにヘリコプターへと乗り込んだ。続けて柳が機内に乗り込む。仮にも彼は日本支部にとつての要人、アンダーソンたちにとつては貴重な人質になるのだ。もちろん人質という名の通り、彼の額には常にノエルが銃口を向けている。最後はアンダーソンだ。彼は機内に乗り込む直前、僅かに足を止めた。失ったものの大きさ、この地を離れ難くさせているもの。

「早くしろ、アンダーソン」

「……ああ、わかっている」

ケラーに急かされて、惜しむように、アンダーソンは背後を振り返った。その瞬間、胸元のネクタイがプロペラの風によつてふわりと、宙に舞い上がる。

薄暗い空の下でも彼の眼にははつきりと、その古びた留め具が目に焼きついた。

「父さん……」

彼は雨に濡れた自身の顔を今一度拭うと、覚悟を決めてヘリに乗り込んだ。

プロペラ音と共に、再びヘリは上空に舞い上がる。降りしきる風雨に視界は最悪だった。

「しつこい奴だな……」

俺は悪態をつきながら、柱の影へと身を隠した。男はかなりの怪我を負っているにも関わらず、依然として戦闘を止める気はないようである。

俺は男が視界の数メートル先にいるとわかると、再び違う柱に向かってワイヤーを飛ばした。これは自動で回収できるタイプであり、回収とは逆にその耐久性と勢いから、俺自身の体をワイヤーを投げた先まで運ぶ事が出来る。正直、この機能がなかつたら、とつくに俺の体力は尽きていただろう。

男は俺が移動したとわかると、すぐさま方向転換をした。奴の右手にはナイフ、先ほど俺が投げたものを地面から抜き取つたのだ。

「……人様の武器を勝手に押借してんじやねえよ」

柱に背を預けて、俺も一息を入れる。だが、それもほんの一瞬だ。すぐに戦闘態勢に戻らなければいけない。ここは戦場だ、何が起こるかわからないのだから。

瞬間、男は俺が隠れている場所とは見当違いな所へとナイフを投げた。

「なんだ……ついにおかしくなったの……か」

カシャンと音がした。男のナイフは何かに当たったのか、否、それは弾かれたのだ。

「ここもまた……すごい有様だねー」

この場に不釣り合いな、気の抜けた声が響いた。

——ああ、この声は。

「聰太、無事？」

「……なんとか。これでもよく戦つた方だと思う」

「おつかれ」

そういうつて彼女は、リニアは、俺に笑いかけた。薄汚れた格好で懐中電灯を手に笑う姿は、さながら冒険を楽しむ子供の様だ。気づくと、俺は不思議と安堵していた。やつと日常の一片を垣間見ることができた様な、そんな心地だ。

リニアは俺に近づくと、紙きれに何かを記して、俺の体へと張り付けた。

「気休め程度だけど」

そういうつて紙をはがすと、驚く事に、完全とはいえなくとも、僅かに俺の傷は癒えていた。

「すごいな……」

「これでも、医学については多少心得てるからね。それと、はいこれ。忘れ物」

リニアの手には、2本のナイフと鏃があつた。俺は促されるままにそれを受け取る。すると、彼女はここからは自分の番だとでもいうように、俺に背を向けた。

「さてと……あれ？ アンタ、この前私に負けた人？」

「リニア・イベリン」

「何でこんなところに……って言いたいところだけど、大方、協会と手を組んだってことか。まあ、別にいいけど。さつさと倒して、先に進めばいいだけだから」

そういうと、リニアは勢いよく男に向かって走り出した。

リニアの最初の突撃をフーゴは見事に交わした。彼女も、彼から流れる血液に多少の油断をしていたのだろう。リニアは、すぐに相手との距離を取り直した。

奇妙な事にフーゴは戦いの最中においても、非常にゆったりとした雰囲気を纏っていた。緊張感などまるでない、それでも明らかに殺意だけは漂わせている。それは190センチという彼の体格からなのか、あるいはだらりと宙に放りだしている両腕からなのだろうか。

「俺も何か、何かサポートを……!」

ふと、鈴木の脳裏に浮かんだのは先のハンス・ブリーゲルとの戦いだ。あの時も彼らは接

近戦で2対1の優勢だった。

「ハンス・ブリーゲル」

突然、フーゴはその名を口にした。

「鈴木聰太、君と同じような戦法を行う男だ。ナイフは人を殺すためでなく、あくまでもサボートの役割を果たすため。殺人道具を殺人に使わない、実に面白いね。もちろん、私はそんな戦法に微塵も興味は沸かないが」

「またお得意の一人語りに入るの？ 悪いけど、私たちはそんな時間に付き合っている暇は」「ああ、そうだ。私は協会と手を結んだ。全ては私の研究のためだ」

リニアはフーゴに構うことなく、再び戦闘姿勢をとつた。脇腹への蹴り。男はまるで攻撃が分かつていたかのように、身を反らした。だが、彼女の攻撃はそれで終わりではない。

リニアは蹴りの勢いを失わず、右手に握っていた紙きれをフーゴに向けて放つた。書いてある文字は”花火”。リニアが素早く後退したと同時に、フーゴの体はボンツという音を立てて、大きな花火を打ち上げた。

——人が、燃えている。

焦げ臭いにおいが一気に一帯に広まつていった。しかし、所詮は魔法。あつという間に炎は消えてしまつた。それでも手負いの人間から戦闘能力を奪うには充分だ。

リニアはゆっくりと、フーゴへと近づいた。

「終りね」

「いや……まだだ」

「なつ……三

鈍い音が聞こえた。そしてそのすぐ後に、リニアの体が俺の横を通り過ぎていった。

俺は何が起こつたのかすら、わからない。

目の前のこと、今、リニアに蹴りを入れた男は数10秒前まで、炎の中で苦しんでいた男じゃないのか。なのに、何故彼女に攻撃ができる。

俺は、はだと我に返つて後ろを振り返つた。

「リニア三」

「だい……じょうぶ、前戦つた時よりは威力は落ちてるから」

——確かに男の体力は減つている、だが先ほどのリニアの攻撃を彼はまともに受けていたはずである。

すると、男はまるで俺たちに説明するかのようにコートを脱いだ。

「なるほど……協会からの支援か」

男はコートの下に、防炎ベストを纏つていた。しかも協会の特別製、一般的のものと違い文字が埋め込まれているそれは遙かに対炎性が高いやつだ。

俺はもう一度リニアへと振り返つた。彼女は今の奇襲が失敗したことへの落胆、そして何より先ほどの男の攻撃のせいで、いまだ立ちあがる事はできないでいた。

このままでは長期戦が長引く一方だ。そう思つた俺は、少しでもリニアの体力回復に努めるためにできるだけ時間を稼ぐことにした。手持ちのナイフは増えた。少しでも、少しでも時間を稼げればいい。

俺は男に向かつて走り出した。気づくと、彼も地面に落としたナイフを手にしている。それは俺と同じもので――

「しまつた……!」

明らかに俺は動搖していた。

男のナイフが俺の胸に一直線に迫りくる。

——ナイフで防ぐか？いや、駄目だ。力の差で俺が押し負ける。

「つ……!」

殆ど無意識に近い中、俺は後方へと重心をずらしていた。間一髪というところで、男のナイフが俺の左肩を過ぎて行つた。

すかさず、俺は懐から紙を取り出して地面に投げつける。書いてある文字は”早く”。急い

で男の間合いから抜けなければいけない。

だが男の方もそれを見逃さなかつた。避けられたナイフを彼は俺に向かつて放つた。

「痛つ……」

致命傷は上手く避けたが、ナイフは俺の左腕をかすめていった。

早さが上がつてゐるというのに、相手の行動を予測して攻撃を放つ。体力が削られていく長期戦では、経験がものをいう。圧倒的に男の方が有利になつていくのがわかつた。

背中に走る痛みを覚えながら、リニアはやつとのことで上体を起こした。彼女の数メートル先では鈴木がフーゴと奮戦している。

ふと、彼女は自身の左腕につけている腕時計に目をやつた。

午後8時。いつもならTVを見るか、居間でゴロゴロとしている時間だ。

——早く終わらせよう。

リニアはいつも通りの「日常」に帰るため、痛みで痺れる体に活を入れた。

普段なら明日の授業計画、もしくはネットショッピングをしている時間だ。そう思いながら、金色の魔女はアンダーソンが提出した書類に目を通していた。

最悪の事態は免れるはず——、しかし彼女にもこの事件の顛末がどうなるかは予想ができない。

魔女は静かに頼つた。皆が無事に帰つてくる事を。

一方、同じ頃。ノエルは上空にいた。右手の拳銃はずつと柳のこめかみに当てている。彼女にとつては初めての飛行だったが、今はそんな好奇心を打ち消すほどの緊張感が機内に漂っていた。

8時。

アンダーソンは、ヘリに備え付けられている電子時計を見て、あつという間に時間が過ぎ去っていくのを感じた。それと同時に彼はつい先ほどの悲劇を思い出す。

アンダーソンの頭には、絶望と困惑。この二文字だけがちらついていた。

「はあ……」

柳が零したため息は当然の様に、プロペラ音に吸い込まれ、同乗者は何一つ気付かない。彼は今朝見た新聞の占いコーナーを思い出していた。最悪といつても過言ではないほどの内容だ。彼は現在の自身の状況を見て、あれはガチなやつだということを思い知った。そして一刻も早く、家族に会いたいと思うのだった。

8時。

鈴木はそんなことを考える余裕は一切なかつた。

彼が後ろに下がつたと同時に、今度はリニアが前に出た。すかさず鈴木のサポートが入り、彼女の体は物凄い速度でフーゴへと迫っていく。

入つた、そう思いながらリニアは自身の拳に力を込めた。しかし、彼女の体がそれ以上動く事はなかつた。

「何で……」

困惑した表情でリニアは視界を巡らせる。すると、フーゴの手には紙——、そう、彼は魔法を用いたのだ。フーゴが魔法を用いるとは、微塵も思つていなかつたりニアは、明らかに動揺を隠せずにいた。

何もすることができないまま、その一瞬を見送るリニア。そんな彼女に、フーゴは精一杯の力を込めた拳を彼女の頭にお見舞いした。

魔法が解けた彼女の体が、再び宙を舞う。そしてまた新たな流血が室内を濡らしていくのだった。

「8時か」

ケラ一は揺れる機内の内で、誰にも聞こえない様な声で呟いた。彼の機嫌はあまり良くな
い。だが、仕事はこなすつもりだ。

ケラ一は舌打ちをすると、再び座席に背を預けた。目指すは忌々しき協会、日本支部だ。

8時。

奏は冷めきつた夕食を前に、じつと座っていた。普段と違い、物音一つしないほど静まり返った室内に目をやる。明かりはついていた。だが、彼女の瞳に映る世界は、まるで色を失くしてしまったかのように静止している。

故に、奏はひたすら願うのだ。

早く皆が帰つてくる事を。

故に、奏はひとり待ち続けた。

早く日常が戻つてくる事を。

「弱くなつたな、リニア・イベリン。いや、私が強くなつたのか」

フーゴは壁に背を預けたまま蹲つているリニアに振り返つた。その口元には僅かに嘲りの笑みを浮かべている。彼女はそれに答えるかのように立ちあがつた。

「そう？私は弱くなつてないし、あなたも強くなつていない。ただ戦闘条件が悪いだけ。前みたいな公園だつたら結果は私の勝ちよ。まあ、聰太がいるから今回も私の勝ちなんだ

けど?」

「ほう」

「それより一体どういう理由で私に付きまとつてくるのか教えてくれない?」

リニアの問いにフーゴは答えなかつた。無機質な室内には何一つ響く音はなく、まるで時間が止まつたかのようである。俺は男から視線を外すことなく、一步また一步と距離を取つていつた。

「伝説のように伝わるetcの文書。そしてing」

フーゴは静かにこちらへと顔を向けた。

「ingの本体、3年ぶりだな」

俺は何も言わず、視線だけを彼に返した。

「etc」いう能力は口伝、あるいは古い本に記された内容によつて今日まで伝わつてゐる。ingもその内のひとつだつた。協会も研究所もこの特異な能力をいち早く自分たちの手中に取めたがつた。だから戦争が起きた」

それはわかっている。何度も聞いた話だ。

「だが今更私はingに対する関心はない。鈴木聰太は非現実的な事柄を徹底的に無視しようとする、いわばリアリストな存在の彼が再びingの能力を発動する可能性は少ないと感じたからだ。……あれだけ大きな争いを起こして、多くの人間が死んでいったというのに研究所はその出来事すらなかつた事にしようとしている」

「無念だな」

「そうだな、鈴木聰太。君の言う通りだ」

「もうお前にはingに対する関心はない。なら何故、お前はこんなことをしている。研究所の命令ではないんだろ」

「問題はここからだ。etcの学問化によつて多くの人間が魔法を学べるようになつた。もはや常識といつても過言ではない。だが——」

フーゴはちらりヒリニアを見た。

「だが——、その常識が通用しない人間もいた」

瞬間、フーゴは勢いよく自身の上着を目の前に放りだした。視界が大きく塞がれる。反射的に俺は身を引いたが、男は既に次の戦闘準備に入っていた。ナイフを手に迫つてくる。すかさず俺はナイフを持つ手に目がけてワイヤーを振るつた。

「くっ」

微かなうめき声を上げて男の動きが鈍る。それでも彼の動きが完全に止まることはなかつた。もう片方の男の拳が俺の腹部に深く入り込む。そして奇妙な浮遊感を感じた後、俺の体は床に叩きつけられた。電流のように痛みが全身をかけめぐる。このまま意識を手放してしまつた方がどんなに楽だらうか。

「聰太」

リニアの声に俺の意識は急激に現実へと引き戻された。すかさず次の攻撃に備えようと顔上げたが、

「リニア三

男の手にしたナイフが今にもリニアの腹部めがけて迫つていた。戦慄が走る。しかし俺の心配は杞憂だつたのかのように、彼女は男の攻撃を華麗に足で捌いていく。それでも先ほ

どの戦闘ダメージが消えたわけではなかつた。リニアは防御に徹しており、足元は僅かにふらついている。

「おい三いい加減さつきの話の続きを言え三」

俺は彼らの戦闘に割り込むように声を上げた。するとフーゴはそれに答えるように、リニアから距離を取るため大きく後ろへと下がつた。

「鈴木聰太、数ヶ月前。リニア・イベリンを排除しようとした男がいたのを覚えているか

「……妙な言い回しだな、ハンス・ブリーゲルの件だろ」

「それは真実か？」

「……真実も何も俺は事実を言つてる」

「残念なやつだ」

そういうと、フーゴは呆れたようにため息をついた。おそらく彼は再び仕掛けてくるのだろう。俺は冷静に――、そう、冷静に周囲を見回した。身を隠せるところ、あるいは何かこちらに有利になるような条件を探すために。

瞬間、ふと俺は気付いた。リニアがやつてきた方向。遠くの方で微かに敵の勢力と思しき集団が倒れている姿が目に入った。それはつまり、この階にいる敵はあと俺たちの目の前にいるこの男だけではないのか。

確信はなかつたが、それでも先ほどよりも闘志が復活してきたのが自分でも分かつた。

——冷静に、冷静に現実を見る。

俺は自身に言い聞かせるように、そう心の中で呟くとリニアの元へと駆け寄つた。

「5分だけ耐えてくれ」

「え？」

零れる様なリニアの疑問を無視して、俺はフーゴと向き合つた。彼は律儀にもこちらの準備を待つていたかのように走り出す。左手にはナイフ。俺は深呼吸をするとフーゴに向かつて突進した。

思えば、俺は今まで奴の攻撃を防ぐことでいっぱいだつた。それは自身がサポートしかできないと思つていただからだ。だが、いくらサポートに特化しているといつても攻撃に転じる事が出来ないわけではない。そして何より――、

「焦るな」

フーゴとの距離まで僅か数メートルといつたところで、俺は奴がいる方向と見当違ひな向きへと体を捻つた。そしてすかさず、ワイヤーがついたナイフを地面へ投げる。まるで床の上を滑つてゐるかのようだ、俺の体は奴の周りを移動した。フーゴも俺の行動を警戒し、距離を取ろうとするが――、

「……ハンス・ブリーゲルに教えを乞うたか」

男の体は止まつていた。

俺の投げたナイフが、男の行動よりも早く床へと達したようである。ナイフにつけられた紙に描かれていたのは“止まれ”の文字。フーゴは怒りの籠つた瞳を俺に向けていた。

「俺は、ハンス・ブリーゲルからは学んでいない。これは生き残るために訓練所で身につけた術だ」

俺は勢いよくコンクリートの柱に向けてナイフを放つた。瞬間、硬直したフーゴの頭上で大きな爆発音が起る。肉弾戦では到底勝ち目がないなら、他のものを利用するしかないのだ。

「ハンス・ブリーゲルは……奴は悪魔そのものだ。奴は最後まで私に目をくれる事はない……あの時、中東での戦いのとき、私は確実に死ぬと思っていた……それでもまだ生きている……研究をしなければ……いけないんだ」

フーゴは先ほどの爆発で足を負傷したにもかかわらず、俺に向かつて一直線に走り出していた。

「鈴木聰太……Chaserの遺品を利用して私を処理できると思ったのか? そんなくたびれた代物に俺が負けるわけがない! 僅か数秒しかもたない魔法で私が倒れるわけがない!」

既に限界は近いのだろう。彼は俺が繰り出したワイヤーを避けることなく、ひたすら前進し続けた。俺も俺で必死にワイヤーに力を込めた。ワイヤーが捲きついた彼の腕は、やがて血が滲み、弾けるように血しぶきを上げると、やっと男は静かに歩みを止めた。

手持ちの紙は残り二枚。俺は最後の攻撃とばかりにワイヤーを手放し、精一杯の力を込めてその二枚を放つた。描かれた文字は「止まれ」と「爆発」。男の体は大きな爆発音の中へと吸い込まれていった。

しかし――、

「まさか……?」

フーゴは血だらけの体を纏いながら、再び走り出した。その姿はもはや狂気以外の何物でもない。迫りくる男。しかし、俺の手元にはワイヤーもなければ、紙もない。避けることは不可能だった。

ならば、残つた方法は一つしかない――。

「リニア——!」

俺の呼び声に答えるまでもなく、彼女の拳がフーゴの体を吹き飛ばした。視界から勢いよく消えた男の体。それと同時に肩を大きく上下に動かしているリニアの姿が飛び込んできた。

彼女はちらりとこちらに微笑んだかと思うと、すぐに男の方へと視線を向いた。

「フーゴは動かない。」

俺とリニアの呼吸音だけが室内には響いていた。その奇妙な静けさに思わず息を飲む。しばらくして、男の体がびくりと動いた。そして口元から溢れ出た血を床に吐き捨て、「これで終わりか……フーゴ……フーゴ・ベル」

男は自身の存在を確認するかのように、二度名前を口にした。口元には何故か不気味な笑みを浮かべている。

「ベルコルのほら吹きめ」

「ベルコル?」

思わず俺はその名を繰り返していた。しかし男は、それに答えることなく自身が話したい事を呟くだけだ。

「etcの文書とingを同時に回収するなど不可能に違いなかつた。協会が何百年もの間果たせなかつた大望だ。集団の追う年月が、一人の男が追う年月に劣るわけがない……あれは呪いだ」

気づくと、フーゴの視線は俺に向けられていた。

「鈴木聰太、お前が再び奴と合いまみえても奴は変わつていいだろ。彼が幻想から逃れられるわけがない。たとえ、ing本体であるお前が死んだとしても、あの男は次のingの人間を探し出すだろ」

男の瞳には僅かにこちらを挑発しているような色が伺える。だが、彼の体は既に立ちあがることも不可能だろ。俺は動けない男の方へ一步踏み出した。

「フーゴ、お前はまだ答えていない。お前の目的は何だ」

「……我々の目的は、研究の果てに到達する事」

男は臆することなく答える。その瞳は研究者としてまだ見ぬ何かを追い求め、探し続けている様にも見えた。俺もリニアも黙つて彼を見下ろす。すると、突然彼は口を開き俺たちの後方を見据えた。

「お客様がいらっしゃったようだな」

その言葉に俺たちは後ろを振り返った。

周囲は既に瓦礫やナイフの傷でひどく損壊しており、未だ戦闘は続いているといつてもおかしくないほど荒れている。そんな室内の奥のほうから、数人の足音が聞こえてきた。音からしておそらく3人と言つたところだろうか。

瓦礫による埃が舞う中、懐中電灯を手にしたそれらの影はゆっくりと姿を現していく。

俺もリニアも戦闘態勢に入り、その一点だけを注視しつづけた。

「あんたは……」

足音と共にその影が鮮明になるにつれ、次第に俺たちの体から緊張感が抜けていくのがわかつた。まず始めて現れたのは、以前、葵が紹介してくれた人物、柳公平だつた。そしてその後ろにぴつたりと張り付いて、彼の頭上に拳銃を突きつけているノエル。彼女の背後には、やや重たい足取りをした男——アンダーソン・カイルがいた。何よりも印象的だったのは、柳公平の雰囲気が以前見たときよりも霸氣を感じないという点である。

「……そうか」

俺は何となく状況がつかめてきた。一方のフーゴは、俺と正反対の位置にいたためか、どうやら未だ協会の勝利は揺らいでいないようである。そんな哀れな男を見て柳は苦々しげ

な表情で煙草を取り出し、男に声をかけた。

「一応、これも義理だ。今回の顛末を報告しといてやろう。死傷者はジエームズ・カイル一名、こちら側は怪我は負つても命に別条はない」

「待て、まだ俺の方が片付いていない。あとはこいつらを始末すればいいんだろ」

男の主張に対し、柳は何も言わずに俺とリニアに顔を向いた。反射的に、思わず腰を落としていつでも回避できる状態にする。しかし、相手は柳ではなかつた。彼は顎で俺たちの後方——フーゴを指し示した。

フーゴは必死に立ち上がりうとしていた。

「鈴木聰太……まだ、まだ終わっていない」

「いい加減にしろ。戦いは終わった」

「戦意を失くしたのか……鈴木聰太三」

フーゴは大声をあげる。

それはまるで手負いの狼が必死に威嚇しているようで、どこか滑稽に思えた。俺は興奮する男とは反対にひどく冷たい声で、

「……戦意がないと言つたら？」

「終わりだ。鈴木聰太、お前の敗北でな」

子供の相手をしているような気分だ。やれやれといつた様子で俺がフーゴへ適当に返事をしようと思つた直後、後ろのほうで誰かが倒れる音がした。

振り返ると、柳公平が地面に倒れ、頬を痛々しげに擦っていた。その前に立ちつくしていたのはアンダーソン・カイル。おそらく彼が柳を殴ったのだろう。

「ど、どういうことだ」

俺よりも早く、フーゴがつぶやきを漏らした。

彼が見ている現実と、彼が思つていた現実との齟齬に脳の理解が追いついていないのだろう。アンダーソンが柳を殴る。それは現在の単純な力関係を表すには十分すぎる行為だった。

「どうしたことなんだ……何が起こっている……」

混乱するフーゴ。現在の状況を肯定する自分と否定する自分に挟まれているといった気分だろう。

ふと、俺はフーゴから視線をずらした。すると、その時になつてようやく気付いた。三人の影のほかにもうひとり、いつの間にかその男は立っていた。スクリーンを隔てた向こうにいるような存在感を纏っている。その顔はまるで喜劇を楽しんでいる聴衆のような、あるいは全てを馬鹿にしているような、そんな笑顔を浮かべていた。

「どうしてあいつがここに……」

「ケラー……」

フーゴは見知った顔を見て活氣を取り戻したのか、立ち上がるほどに復活していた。ゆっくり、ゆっくりと俺に向かつて歩いてくる。俺がそんな男を大して迎撃することもなく見つめていると、背後でかちやりと音がした。ノエルだ。ノエルがフーゴに向けて拳銃を構えている。

「改造人間ごときが何故私に拳銃を向けている……」

その二つの銃声は俺が思っていたよりも早く、短く、この閉鎖された空間に響いた。ノエルが放った銃弾は見事にフーゴの両足に穴を開けた。彼は避ける体力もなかつたのか、まともに銃撃を受けその場に崩れ落ちた。顔だけはじつとノエルを見つめている。その瞳は憎しみ、怒りに満ちていた。だが、唯一口元からは笑みが消えていなかつた。

ぞつと寒気が全身を巡つたと同時に、フーゴは懐から取り出した何かを勢いよく宙に放つた。

「——伏せろ!」

俺の声は爆発音にかき消された。甲高い悲鳴が上がる。この声はノエルだろうか。フーゴが投げたのは小型爆弾だ。ロベルトが使用していたものに違いない。無造作に投げられたものなので、誰かにという命中率はないが、被害がないわけではない。爆風によつて、柳やアンダーソンはコンクリートの柱のほうへと吹き飛んだ。ノエルやリニアも飛んできた

瓦礫にいくつか傷を負つたようである。

突然の攻撃に、周囲は戸惑いを隠せないでいた。そんな中、俺は必死に次の攻撃へと集中する。ここで集中力を失うわけにはいかなかつた。俺の目は煙が漂う室内でもすぐに男の姿をとらえた。すでに装備はないに等しく、肌がのぞいている部分は汚れや血で目も当たらないほどだ。

フーゴは俺の視線に気づいているはずだが、彼の眼は柱に背を預けている柳へと向けられていた。

「これはどういうことなんだ……協会は私に協力するんじやなかつたのか?」どうなつている!?

荒々しい声をあげるフーゴに対し、柳は余裕を含んだ顔で煙草を取り出した。

「常識的に考えてよ、旦那」

彼は気持ちよさそうに紫煙をくゆらせながら、フーゴを見据えた。

「敵は改造人間がひとり、協会でも名の通つてゐる武闘派戦闘員がひとり。対してこつちは平凡なおじさんと研究所の人間ひとり。どう考へても分が悪いでしょ。無理無理、死にたくないし」

あつけらかんとした柳から忌々しげに顔を背け、フーゴは先ほどから傍観者を決め込んでいるケラーヘと顔を向けた。しかし、彼はちらりとも関心を示さずひたすら劇中の人間を眺めているだけである。

そんな様子を見て、柳は憐れみを込めた調子で、

「今日は協会長の指示でオタクの味方だが、それは状況がうまく運んでいたらつていう条件付きでね。じやないと、こちらが手を取る意味もないし。まあ、なんだ。利用させてもらつたつてことかな。お疲れさま、フーゴさん」

「このつ……卑劣な連中め……！」

再び起き上がるうとするが、彼の体はもはや自由が利く身ではなかつた。じたばたと足を動かすも、一步も前に進めない。勝敗は明らかだつた。俺とリニアはじつと男の動きに警戒を続けていた。柳はアンダーソンに銃口を向けられて、やれやれといった様子だ。ノエルは傷口をさすつてゐる。破けた服からはより痛々しさを感じた。

「フーゴ・ベル。チエックメイトだ」

アンダーソンは柳からフーゴへゆつくりと銃口の向きを変えた。

「はつ……協会はなぜ、アンダーソン・カイルを処理しなかつたんだ……」

「本気じやなかつたんだる。柳公平なんていう中途半端なやつを派遣したんだからな」
アンダーソンの声音は淡々としていた。

「敗北を認めろ、フーゴ・ベル」

「は……ははつ、まだ終わっていない……援軍だ、援軍がきたぞ」

彼の言う通り、俺たちの周囲にはいつのまにか大勢の協会の人間がいた。丸く円を描くようになに配置されている。しかし、彼らは援軍というより――、

「お前の言う援軍とは既に契約を結んでいる。研究所の人間を排除する代わりに、協会は改造人間について一切接触をしてこないってな」

アンダーソンの言葉に彼は絶句した。

もはや繰るものはない。あの男を除いては。

「お前は本当にあのフーゴ・ベルなのか？」

先ほどまでずっと傍観を決め込んでいた男がやっと口を開いた。青年。というよりはやや老けた風貌の男。ケラーだ。

「こんなに口の回る男だとは思わなかつたよ」

「ケラー……お前、どうして生きている」

「さあ。私は君と違つて運がいいんじやないかな」

同じ研究所の仲間であるはずなのに、彼らの間には妙な緊張感が漂つていた。

「フーゴ。どうして協会と手を取つた？ 我々は個人主義を主としているけど、いくら何でもこれはタブーを犯している。私は悲しいんだ。かつての仲間がこうも生き恥を晒していふことが。今すぐにも退場したほうが君のためなんじやないかと考え中だ」

そういうながら、ケラーは拳銃を取り出してフーゴを見下ろした。

「は……ははははは!!」

突然、フーゴは狂ったように笑い出した。何がおかしいのか、あるいは死を目前にして狂つてしまつたのだろうか。瞬間、彼の瞳は俺とリニアをとらえた。

「見たか、鈴木聰太、リニア・イベリン。これが研究所と協会の正体だ。どちらも悪党の集まりだ。善良な考えを持ち合わせていてるやつなんか一人もいない!!」

フーゴは間髪いれずに叫び続けた。

「なぜ、etcの文書が公開されなかつたのか。写本が存在するのになぜ文書はないのか。3年前には確かにあつたのにだま答へは簡単だ、それは誰かが盗んだ人間が今も文書を隠しているからだ!!」

盗んだ人間……盗んだ人間……誰だ、それは。いや、俺の頭には真っ先にその人物の顔が浮かんでいた。

「そう、23年前にetcの文書を盗んだ、あの金色の魔女が隠しているんだ!!」

わずかに衝撃が走る。それでもフーゴの口はふさがらなかつた。

「だが私はそれでも文書の行方を知る手掛かりはないか調べ続けた。そのために私は協会と手を取つてまで調べた。23年前の資料を隅から隅まで調べていると、ある事実がわかつた。リニア・イベリン。なぜか、彼女の生年月日と文書が紛失した日付が一致していた」

「なんだよ!?」

ケラーは驚きを隠せずにいた。その顔はゆっくりとリニアのほうへ向けられる。

「ちょっと待て!! なんでそこでリニアが出てくる!!」

リニアも俺と同じように、何が起きているのかわからないという顔をしていた。しかし、彼女の顔はわずかに血の気を失つていくようで、

「わからないか。鈴木聰太、リニア・イベリン。金色の魔女は生まれたばかりの胎児の体の中にetcの文書を隠した。つまり、その女は人間であり、etcの文書そのものだ」

「な……そんなバカげた話があるか!!」

俺の荒げた声だけが響く。周囲は驚きで満たされていた。アンダーソンも柳も、ノエルも、ケラーも、そしてもちろんリニア自身も今にも足の力が抜けて倒れそうな程、顔色が真っ青だつた。

「旧政権の連中は全員知つてゐるだらう。彼女を生かしておくか、処理するか。協会連中も決めかねてゐるといつたところか、先日のハンス・ブリーゲルの件はそれだらう。そして今回の改造人間の問題は、この事實を知つてゐるものの中殺といつたところか。ジエームズ・カイル。またその息子のアンダーソン・カイル。おそらく私も含まれてゐる……だが、リニア・イベリンは眞実を知つてしまつた。協会の思い通りにはさせない……」

そしてフーゴは、アンダーソンを見てニヤリと笑つた。

「アンダーソン・カイル。お前も協会の掌の上で踊らされていただけということだ。お前の愚かな行動も全部な」

「……黙れ」

アンダーソンは殺意を込めた目でフーゴを見つめた。対するフーゴは、嘲りを込めた笑みで返す。既に体力は底を尽きているのだろう。先ほどから何回か血の混じつた咳を繰り返していた。

「リニア・イベリンに対する研究は続けなければいけない……etcの文書を取り出す研究を。だが、それも終わりだ。全部。何もかも終わりだ」

フーゴは再び口元から血を零しそうになつたが、今度はそれを無理やり飲み込んだ。
「どうやら私はここで退場するらしい。だが、それはお前らも同じだ」

最後の強がりといったところだろうか、直後、フーゴは突然嘔吐をし始めた。どろどろとした胃の内容物が落ちていき、徐々に腐臭が漂つてくる。ふと、何かゴトリという音がした。彼の中から出てきたもの、それは――、

「……体内にも隠し場所はあるんだよ」

「リニアつ三」

俺はすかさずリニアの体に覆いかぶさるように、柱の陰へと飛び込んだ。

先ほどよりも大きな音とともに、閃光が俺たちを包み込んだ。

辺りは暗く、周囲はコンクリートの瓦礫だらけで、吸い込む空気はひどく埃っぽい。建物は今の爆発で支柱のような部分が破壊されたのか、そこ等中がヒビだらけだ。倒壊までの時間はあと少しといったところだろうか。

「ふ……ふはははははは」

この場に似合わない大きな笑い声が響いた。彼の体は素人の俺から見てももう助かる見込みは無いというのが明白なほど、真っ赤に染まっていた。

何が可笑しくて笑っているのか。その笑いには歓喜と憎しみと怒り、あるいは悲哀にも似たような感情が含まれているのだろうか。

「この建物は地上に出ている部分は丈夫に作られているが、地下は脆い。そしてここは地下の奥深く。全員、終わりだ」

フレゴは横になつたまま、俺たちを嘲笑した。

「冗談。こんなところでお前と道連れなんてしねえよ」

事実、俺たちは先ほどの爆発で数カ所けがを負つたものの、急いで地上に向かうくらいの体力はあつた。早くこんなところから抜け出してやりたい。

「リニア・イベリン……お前はここで死ぬのが正解だ」

「いい加減にしろ三死にたいなら一人で勝手に死ね」

俺が声を上げる前に、彼女は瓦礫に拳を叩きつけながら怒鳴つた。敵の挑発にここまで声を荒げた姿は見たことがない。疲労と、先ほどのフーゴの言葉がリニアをここまで追い詰めたに違ひなかつた。

バラバラと細かいコンクリートの欠片が頭上から落ちてくる。

フーゴの顔にはいまだに笑みが浮かんでいた。いや、もう表情を変える体力すら残つていないのでかもしれない。彼の呼吸は先ほどよりも小さくなつていた。

「父親が死んだようだな、アンダーソン・カイル」

突然、自身に矛先が向けられた彼はひどく疲れた表情をしていた。睡眠も食事もろくに取れていないのか、顔色が悪い。更に、親族を亡くした想いはそう簡単に彼の体から消え去るものではないだろう。

——やりきれない。

アンダーソンはぼうっと地面に落ちていたナイフを見つめていた。フーゴの挑発が聞こえているのか、あるいは——、

「ダメ三

気づくと、ノエルがアンダーソンの両手を抑えていた。彼女が止めた両手に握られていたのはナイフ。その刃先はアンダーソン自身に向けられていた。

「今ここでお前が死んだら誰が私を守る? お前は私を最後まで守るって約束した! それに……それにお前が今ここで死んだら、じじいが守つた意味がなくなる!」

まるで幼い子供が親に叱られているかのような光景だつた。アンダーソンの瞳から水滴がボトリと落ちてくる。眉一つ動かさない彼の顔から、唯一その涙だけが彼を人間だと感じさせた。既にアンダーソンの両手に力は入つていなかつたのだろう、ノエルは彼の手元からあつさりとナイフを抜き取り、遠くのほうへと投げた。

「まつたく……早く解放してくれないかね」

くだらない三文芝居を見せつけられているといった顔で柳は深いため息をついた。彼はノエルから銃口を下ろされているにも関わらず、律義にもこの場にとどまり続けていた。エレベーターの近くにいた協会の連中はいつのまにか、避難しているというのに、この男は暢気に煙草をふかしている。

「あらら、最後の一本になつちまつた」

そういうながらも、彼は惜しみなく最後の一本に火をつける。ただでさえ、埃っぽい室内が余計に息苦しくなった。

「お前ら、とつと地上に出たほうがいいぞ」

その気持ちは俺も同じだった。先ほどから不安げな音を立てて、コンクリートの壁がはがれ始めている。

「リニア……」

そうつと俺は彼女の顔色を窺つた。パニックは起こしていないものの、いつもとはどこか違う様子だ。胸のあたりをきつく握りしめて、俯いている。

またひとつ、瓦礫が崩れた。

早く逃げなければいけない。しかし、唯一の出口といえるエレベータはここからだいぶ離れているし、途中には大きな瓦礫が通路を塞いでいる。

「どうする……どうすればいい」

必死に考えを巡らせるが何も浮かばない。この場から、安全に脱出できる方法。果たしてそんなもの存在するのか？

「後ろ三」

突然、ノエルの声が鼓膜に響いた。それと同時に俺の体が勢いよく前に引っ張られる。後方で瓦礫が崩れる音がした。どうやらノエルが俺の腕を引っ張ってくれたようである。

「危ないだろ三」

「わ……わるい」

こんな小さな子供に叱られるのは初めてで、こんな状況にも関わらず妙に照れ臭い。

今度はリニアの声だ。それと同時に上方からまざい音が聞こえた。俺はノエルの腕をとつて、大きく体を左へ飛ばした。それと同時に物凄い量の瓦礫が、俺の立つていた場所に降り注ぐ。あと一瞬でも遅れていたら、俺とノエルはペしやんこにつぶされていただろう。

怖い。

ふと、そんな感情が胸の内に湧き上がってきた。いや、これが普通だ。俺は今、非日常の中にいる。普通の人間なら恐怖して当たり前なんだ。瓦礫が落ちて轟音が響く。一步間違えれば、すぐに俺はあの世行きだ。

いや、それはほかの人たちも同じである。

ノエルはあたふたと動き回り、アンダーソンは依然として座り込んでいる。柳はじつと事の顛末を見守り——、ケラーは笑みを浮かべながら俺たちを観察していた。

どうすればいいんだ、俺たちが生き残るには。どうすれば。

「そうか、先生はこうなる」とを見越して私を止めなかつたのか

「リニア？」

彼女はぶつぶつと何かをつぶやいていた。傍から見たら、その様子はパニッシュ状態に陥っているかのようにも見える。

「私が魔法を学ばなかつたのは、私そのものがetcだから。既に持つていてることを再び学ぶことはできない。でも持つている。私が自覚していないだけで」

「おい、リニア。大丈夫か？」

「いける」

リニアは俺の顔を見て、ふつと笑つた。気づくとその笑顔はいつもと同じ笑顔だつた。

「みんなが生きてここから抜け出せる方法がわかつた」

「ほんとか？」

「うん。私がetcなん、ここから脱出する能力を私は知っている」
彼女の瞳は自身で満ちていた。迷いはない、そう言つている。

「ダメだ」

「え？」

「何が起つるかわからない。etcを觉醒させたとして、リニアが無事であるという保証はない」

そう、リニアが言うみんなにリニアは含まれているのか。俺は彼女の肩に手を置き、じつとその両目を見据えた。思ったより華奢なその体は戦闘後の生々しい傷が未だ癒えていない。おそらく中も無傷ではないだろう。それなのに――、それなのにリニアは俺の顔を見て笑つた。

「大丈夫。保証はないけど、できる限り自分で制御できる部分はするし。何より、事實を無視して通り過ぎるなんてこと私にはできない。みんなを、聰太を救える可能性が1%でもあるなら、私はそつちの道を選ぶよ」

「馬鹿野郎……制御つてなんだよ!?お前だつて何もわからないだろ!失敗して、全員あつけ

なく消えちまう可能性だつてある!!」

「それでも!!それでも、」のままだと全員死ぬのは確実じやない!!」「やめる、リニア!!」れ以上……俺は何も失いたくない」

「大丈夫だよ、聰太」

リニアはそつと俺の手を握り、ゆっくりと下に落とした。俺は再び彼女の肩を掴もうとしたが既にその体力はなく、掌だけが宙を掴んだ。

「大丈夫、私を信じて。私も私を信じるから」

そう言つてリニアは俺に背を向けて歩き出す。そして、ケラーと向き合う位置で立ち止まつた。

「ケラーの催眠は対象者の深層心理まで届くはずよね?それなら私の体内にetcの文書が

眠っているとして、私が願えば能力は発動するはず。違う?」

「その通りだ」

ケラーラの言葉を聞くと、リニアは覚悟を決めたように目を閉じた。彼女の呼吸に合わせて、その脈打つ心臓に手を伸ばす男。

——それは一瞬の出来事だった。

リニアの体からものすごい光があふれ出たかと思うと、次の瞬間には空間が静止していた。空中でいくつもの瓦礫の欠片が浮遊している。いや、浮遊という表現は正しくない。彼らの中での時間が止まつたという表現が正しいのだろうか。

とにかくこの場にいる人間以外の物体は、あらゆる動きを止めていた。

「これは……」

俺の口から驚きが漏れる。すると、リニアの体が大きく揺れた。足元から崩れかけた彼女の体を、俺は間一髪のところで受け止めた。

大丈夫だ、生きている。

俺はほつと安堵の息をつくと、すかさず次の行動へと移った。まずはここから脱出をしなければいけない。

「なるほどな……このためにベルコルはケラーを連れてきたのか」

俺はフーゴを無視して必死に出口となるような場所を探した。どこかに非常階段のようなものがあるはずである。

周囲を見回すと、今の衝撃が何らかの影響を与えたのか、アンダーソンと柳は気絶していた。ノエルは改造人間のおかげだろうか、いつも通り。いや、現在起こってるこの現象が不思議に思えて仕方ないらしく、そこら中を見回していた。

俺はリニアを背負うと、立ち上がった。もう自分の中には歩く体力さえ残っていないと思つていたのに、どうやら彼女を背負う位の力は残つてゐるようである。

「さて、どうやつて上を目指すか」

今は何時ぐらいだろうか。10時、いや11時になつてしまつただらうか。早く帰ろう、奏がきつと待ちぼうけを食らつてゐる。

「あんたも利用されてたんだな」

俺はケラーをちらりと見た。

「どうだか」

「なんでそんなに余裕を見せている。ここから脱出する方法を知つてゐるのか」

「どの建物にも非常階段はつきものだ」

そういつて彼は奥のほうを顎で示した。ケラーが騙してゐる素振りはない。きっと本当に非常階段とやらがあるのだらう。俺は彼が示したほうへと足を進める。そしてノエルもアンダーソンと柳を抱えて俺の背中にぴたりと張り付いてついてくる。

ふと、俺は足を止めた。

「ここを出たら、あんたとも敵同士だな。まあ、研究所も協会もうんざりだけど」

「それなら心配ない。私も研究所をクビになつたようなものだ。それにしばらくは我々の勢力も整えなければいけない、こんな風に暴走する奴もいるからね」

ケラーは倒れ伏して、アーヴィングを見て、そうつぶやいた。彼がどんな表情をしているのか、俺にはわからなかつた。しかし、その口ぶりからしておそらく彼は満足しているのだろう。

「早く地上に行つたほうがいいぞ。彼女の能力もいつ解けるかわからない。それにそのちびお嬢さんをとつとと視界から消してくれ」

「ちびお嬢さん？」

思わず俺は聞き返してしまつた。

「改造人間の分際でここまで生き残るとは、正直私も予想外だつた。一応、一人の人間として扱つてやろうと思つただけだ」

そう言い残すと、ケラーはいつのまにか姿を消して、いた。

俺も構うことなく、地上を目指す。

早く帰りたい。早く、リニアヒノエルが無事だつてことを証明したくて仕方なかつた。

「不幸か幸いか……」

目を覚ましてまず口に出した言葉がこれだ。

柳は気が付くと地上にいた。彼の頭上にそびえるのは、先ほどまで倒壊が危ぶまれていた協会日本支部。彼はその建物の真下で横になっていた。通り過ぎるひとたちは柳の事情を知つてか知らずか、口元に笑みを浮かべて好機の視線を向けている。

「あのガキ共……やれやれ、とんだ災難に巻き込まれたな」

柳はため息をつき、体中についた土埃を払つた。おそらく地下は完全に倒壊、あるいは天井から潰れてしまつてゐるだろう。しかし、この建物自体は以前と変わらずに日常の中に存在していた。

「リニア・イベリンのetcが発動されなくても、この建物は倒壊することはなかつたつてこ

とか』

柳自身もこの建物の構造は詳しく教えられていない。魔術的な何かが作用しているのかさえ、彼には与り知らぬことである。

一息つくと、柳は一連の報告もかねて、会議室のほうへと足を向けた。

『柳君、無事で何よりだ』

モニター越しに映る男——ハンス・ブリーゲルは、柳が日中に話した男と何一つ変わらなかつた。いや、先ほどよりは幾らか友好的な態度に思える。しかし、彼はリニアの話になると、少しだけ言葉を詰ませた。彼にとって、リニアは娘同然の存在である。うまく言葉を選んで会話を続けようとしていたが、柳はほとんど彼の言葉を聞いていなかつた。

事後処理はすぐに行われた。

アンダーソン・カイルは協会を離脱した。彼の空白は協会内でも影響が生じてくるはずだが、元々、協会はそれが狙いだつたのですぐに影響は収まるだろう。更に、改造人間も監視対象から外された。

新政権は何も得ることはできなかつた。そう思つた柳は、静かに心の中で彼らを嘲笑した。
しかし、彼が協会に忠義を尽くすのは変わらない。

彼にとつて大切なものは家庭だ。それを守るためには、協会なくしては立ち行かない。どれだけ自身を悪だと罵られても、どれだけ自身の手を汚そうとも、彼は彼の両手に取まる限りのものを守り抜くのである。

「幼稚園に帰るのか？」

「ほかに行先はないからな」

アンダーソンはため息をつきながら、荷台へとトランクを乗せた。ジエームズ・カイルの家の前。この大きな屋敷から出されたのはノエルの荷物だけだった。

協会の車に俺とリニアとノエル、そしてアンダーソンが乗り込む。

「あんたはこれからどうするんだ」

俺がそう聞くと、運転席に座る彼は小さく肩をすくめた。

「仕事は失つたが、貯めていた金があるからしばらくは飢え死にすることはないだろ」

俺が聞きたいのはそういうことじやない。向こうも雰囲気で察したのだろう、一息おいて、再びアンダーソンが口を開いた。

「協会も俺を野放しにしておくつもりはないと思うが、奴らから逃れる策はいくつかある。エドモン・ハイティントン……逃亡者である彼らと遭遇する可能性も少なくない。協力関係が結べるかもな。ただ、フランスに残してきた俺の秘書が心配だから一度はフランスに戻る予定だ」

「そうか」

「ひとまずは、その娘ちゃんを送り届けないとな。君たちも幼稚園で下ろせばいいのか？」

君たちというのは俺の隣ですっかり夢の中にいる女だ。屋敷で一通りの手当てはしたもの

の、いまだ疲労は残っているようである。

「俺は駅前でおろしてくれ。少し歩きたい気分なんだ」

「そうか、といつてアンダーソンは車を発進させた。

ふと、俺は後ろを振り返る。

丘の上に建つ大きな西洋風の屋敷。徐々にその影は小さくなつていった。

主人は非常に偏屈な老人で近寄りがたかつたと聞く。しかし昔はこの家にも多くの使用人が雇われていたのだろうか。今はその賑やかしさはなく、ただ鬱蒼とした木々たちが風に揺れている。

静かだ。屋敷は再び新しい主人が訪れるのを待ち続けるのだろう。春が来て、夏が来て、秋が来て、冬が来て、何年も何年も待ち続けて、やがて草木は茂り、人跡が途絶えてもなお、あの屋敷はまだ見ぬ誰かを待ち続けるのだろう。

「——なんて、詩的すぎるか」

「ふう……」

ノエルは深いため息をついた。鈴木を駅前で降ろした車は、再び夜の街を走り出す。ふと、ノエルは黙々とハンドルを握る運転席を見つめた。

「あの家、どうするんだ」

「さあな。とりあえず所有権は俺にあるだろう」

そう返した顔をノエルはじっと眺める。

「なんだよ、何か言いたいことでもあるのか」

「そうね、じやあそうする」

そういうと、ノエルは後部座席へと体を戻した。そして足を組み、

「あなたがフランスから帰ってきたら、私もあの家に住んであげる」

「は？」

アンダーソンの驚きと共に、車体が大きく揺らめいた。

「危ないだろ?」

「お前が突然そんなこと言いだすからだろ……お前は好きに生きればいい」

アンダーソンは薄い笑みを浮かべた。しかし、ノエルはなおも後部座席で大きく体を反らせている。

「とつぐに私は私の好きに生きている」

「……そうか」

「あ!勘違いするなよ!私は別にお前に好意的な感情を抱いているわけではないからな!私ははじじいのことを思つてだな!」

慌てて運転席へと身を乗り出してきた彼女を、アンダーソンはふつと小さく笑つた。

「わかつたよ、俺がいつこつちに戻つてくるかはわからないが、その時は好きに遊びに来

い

「……何年かかる」

「さあな。まあ、それまでお前は学校にでも通つて暇を潰しておけばいいんじやないか?」

「学校……」

ノエルは気まずそうに顔をゆがめた。しかしアンダーソンは念を押すように、同じ言葉を繰り返す。

「そう、学校だ。そしたらあつという間に時間も過ぎていくさ」

ノエルは再び後部座席に身を預ける。悩まし気に腕組をする彼女をミラー越しに見ると、アンダーソンはまた口元に笑みを浮かべた。

がたがたと大きな音を立てながら、車は夜の街を進んでいく。その車は音とは反対に、どこか希望に満ちた色をしていた。

アンダーソンに駅まで送つてもらうと、俺はやつと見慣れた景色に戻つてきただ気がした。

「お疲れさまだね」

隣にはリニアがいる。

「お前、大丈夫なのか？まだ傷も完全に治つたわけでもないだろ」

「大丈夫、大丈夫」

そういうつて、リニアは大きく腕を振り回す。降りる直前で目を覚ました彼女は、当然のよう俺と一緒に車を降りたのである。本音を言うと、さつさと幼稚園に帰つて体を休めてほしいのだが。

「もう……そんな目で見ないでよ。ごめんつて」

「それはもうわかつたよ」

二人そろって、夜の街を歩きだす。時間帯のせいか、すれ違う人はいなかつた。

「いやー、それにしても衝撃的だつたな」

口を開いたのは彼女からだつた。リニアはいつも通りの笑顔と、照れ臭そうにほんの少し舌を出している、

「大丈夫か？」

「だから大丈夫だつて、無理そうだつたら無理つていうよ。それにしてもお互にひどい格好だね」

「……そうだな」

その後、俺はリニアに何も聞けなかつた。静かな道をそろつて歩いていく。不思議とそこに居心地の悪さはなかつた。

気づくと、俺たちは幼稚園のすぐそばまでたどり着いていた。変わらない街並みを見ていると、先ほどまでの戦闘は夢だつたんじやないかつて思ってきて仕方がない。

「1時……にはならなかつたな。思つてたより短期戦だつたな」

「あのさ」

ふと、リニアが立ち止まつた。

「私たち、普通の人間じやないんだんね」

「……ああ」

「そうだよね、そななんだよね」

リニアは再び歩き出した。俺は何かを言おうと思つて、口を開くがうまく言葉を紡げない。ゆつくりと、ゆつくりと彼女の背中が遠のいていく。

「そ、ういえば三

突然、考えなしに俺があげた声に思わずリニアも振り返る。

「今日、奏が……久しぶりに『馳走作るつて……』

自分でもびつくりするぐらい震える声だつた。

「……なら、早く帰らないとだね」

彼女は困ったように笑みを浮かべていた。

しばらくの沈黙の後、俺たちは揃って走り出す。いつのまにか俺はリニアの背中に追い付いていた。

幼稚園前。

天城紫乃は目の前で止まつた古い車を見据えていた。後部座席から降りてきたのは、大きなトランクを片手に降りる少女。運転席から出てきた男は荷台に積んでいた荷物を下ろしていた。

天城はそつと男のほうに近づく。

「よく生き残ったわね」

その声に気づいた男は天城を見ると、

——バシンツ

鈍い音が夜の街に響いた。玄関口にいた奏もびっくりして外に出てくる。ノエルも驚いた表情でその一部始終を見ていた。

「あんたも女だ。多少の手加減はした。男だつたらもつと殴つているところだからな」

そう言つてアンダーソンは、視線を落とした。

「あんたと親父にどんな対話があつたのかはわからない。だからこれはただの八つ当たりみたいなものだ」

「八つ当たり……ね」

天城は赤みを帯びた自身の頬をさすつていた。通常ならば、物凄い形相で仕返しをするところだが、彼女にも思うところがあるのだろう。先ほどと変わらぬ顔で2人に向き直つていた。

「家族を亡くした身だ、今回は見逃してやろう」

「そうしてくれると助かる」

そう言つてアンダーソンはノエルから荷物を取り上げると、幼稚園の中へ入つていった。彼が玄関にそれを運び終えると、天城が再び彼に声をかけた。

「これからどうする？ 協会からは追い出されたんだろう？」

「一度フランス戻る予定だ」

「そう……ところで敬語はやめたのね。よかつたわ、あなたの敬語堅苦しかつたから」

「俺もこつちの方が楽でいられるからな」

「フランスから戻つてきたら、あのじじいの家に帰るんでしょ」

突然、ノエルが天城の足元から顔を出した。アンダーソンは突然の割り込みに眉を顰めて彼女を咎めた。しかし、ノエルはそんな彼の視線を無視して続ける。

「あいつがフランスから戻つてきたら、あの家に私も住むことにしたんだ。その条件として学校にいかなければいけない」

天城はノエルの口から学校という言葉が飛び出したことに驚き、目をぱちくりとさせた。

「あらあら。今まで学校なんて行きたくないなんて言つてたのに」

「とにかくそういうことだから手続きとかやって」

真つ赤な顔でそういうと、ノエルは急いで部屋の奥へと走つていった。呆然として立つていた奏も慌ててその後を追う。

天城はにやにやと笑いながら、2つの小さな背中を見送つた。

「そういえば、後の2人は？」

「さあ。駅前で降ろしてくれと言われたから、そこから歩いてくるんじやないか？」

そう言つてアンダーソンは車へと戻つた。運転席の窓がお世辞程度に下がる。アンダーソンは夜風に当たるために開けたものだったが、不意にさらりとした髪が彼の視界を掠めた。

「応援してるわ」

「……それはどうも」

「ああ、それと――報告書の件は無事よ」

「……」

アンダーソンは何も言わなかつた。

しばらくして、鈍い音を立ててエンジンがかかる音がした。彼はシートベルトをかけなし、一度だけ天城に顔を向ける。

「また縁があればどこかで。お世話になりました。そういうえば、赤城は元気にすごしてますか？」

「ああ、会いに行つてみるといい。久しぶりに日本に来たんだからな」

「ええ」

「敬語、戻つてるぞ」

「あ」

ふつと互いに笑いあうと、天城は運転席から離れた。それを合図に発進しようと思つたと

ころ、玄関の入り口からアンダーソンを見つめている姿が目に入った。ノエルだ。彼女は恥ずかしそうに後ろで手を組みながら、じつとそこから動こうとしない。

「全く……何がしたいんだか」

父親の遺言のため、しばらくアンダーソンは彼女の面倒を見る事になるだろう。彼はどこか困ったような笑顔を浮かべ、彼女に軽く手を振ると、アクセルを踏み込んだ。そしてブウウンと重たい音とともに、その車は幼稚園を去つていった。

「た……ただいま」

「遅くなりました……」

リニアと一緒に、せーので玄関の扉を開けて中に入る。てつきり仁王立ちした奏がいるか

もしかないと思っていた俺たちは、誰もいない廊下を見て安堵のようなため息を零した。リビングにはすっかり冷めてしまつた料理がそのまま机に並べられており、ラップで蓋もされていない。

「これは……奏さん激おこなのでは？」

「かもしれない」

俺たちは奏を探して、恐る恐る台所へと足を踏み入れた。奏は台所にいた。

「こんばんは」

頬を搔きながら、俺は奏へと声をかける。リニアは愛想笑いを浮かべながら、奏へと近づき思いつきり彼女を抱きしめた。

「ごめんねー、だいぶ遅くなっちゃつた。でもちやんと帰つてきたよ」

「臭い」

奏はしかめつ面でリニアに告げた。開口一番に聞いた声は、普段の声よりもだいぶ低く、

思わずリニアも、ぱつと拘束を解くほどだ。

「先生は？」

奏は無言で執務室のほうを指さした。俺たちがそろつて振り返ると、執務室からはノエルの小さな顔が突き出ていた。

「やつと来た」

「おまたせ」

俺は執務室に行く直前、はたと今の光景を思い出し、自身の体を見直した。服はびりびりに破けている。魔法で傷は塞がつているが、汗やら泥やらで相当臭い。

「……先に銭湯でも行つてくるか」

「え、私も行く」一緒に行こう

すかさずリニアが俺の体にくつついてきた。確かに、奏が顔をしかめる訳だ。自分の体臭はそこまで気にしていなかつたが、同じ状況下だつたりニアからは物凄いにおいがする。

「臭い……」

「ひどい」

「お前は幼稚園のシャワー借りればいいだろ。男一人で行つたほうがすぐに帰れるし」

「いやだ一緒に行く」

「いやだってなんだお前は幼稚園児か」

狭い廊下で言い合つてると、ノエルが不思議そうな顔で俺たちを見上げていた。

「せんとう？なにそれ、お風呂のこと？それならここにあるのに……一緒に入りたいの？」

「そんなわけあるか」

「そうだよ、聰太と一緒にに入るの」

この……俺と正反対のことを述べる女め……

見るからにノエルは訝しげな表情をしている。

「銭湯っていうのは大衆……みんなが入りに行けるお風呂みたいなもので、この幼稚園と同じくらい、それ以上の広さがある場所だ」

手つ取り早く誤解を解こうと説明したが、どうやらノエルの好奇心センサーに響いてしまつたらしい。彼女の瞳は徐々に輝きを増し、

「私も、私も行きたい」

「でもお前、お金持つてないだろ」

その言葉で俺はノエルを一蹴した。ついでにリニアの腕も振りほどく。

「とにかく俺は一人でいく。行きたいなら勝手にしろ。俺は好きに帰るからな」

「そんなー」

リニアが不満げに口をとがらせていると、

「私も行く」

その声は俺の背後で聞こえた。思わず俺たちは揃って振り返った。声の主はもちろん、奏

だ。俺たちが何も言わずにぽかんとしていたせんだろう、奏は見る見るうちに顔を赤くしていった。

「その、銭湯。私も行く」

「か、奏もお風呂まだ入つてなかつたのか？」

俺の問いかけに、奏は素直に首を横に振る。どうやら奏なりに考えがあるらしい。

「ノエル、私お金持つてるから、ノエルの分も払える」

「ほんとやつた三

ノエルは勢いよく奏に抱き着いた。かくして、俺、リニア、ノエル、奏は銭湯にいくことになつたようである。あくまでも、俺は一人で行く体だが。

「待つた、私も銭湯行くわ。久しぶりだし」

気づくと、先生が執務室から顔を出していた。廊下であれだけ騒げば、部屋の中まで筒抜けだつたのだろう。

「あー……いやな予感しかしねえ」

ただでさえ騒々しいメンバーに先生まで加わるとなると、何が起ころかわからない。俺は彼らの準備を待つことなく、急いで幼稚園を後にした。

しかし、リニアたちも元々そんな準備をすることもなかつたようであり、気づけば女4人に男一人という傍から見れば羨ましいことこの上ないパーティーの一員となつていた。

「まあ……いいか」

俺はすでに彼らを振り切ることは不可能だと気付いていた。後ろから聞こえてくる話し声もそこまでは悪くはない。

ふと、俺は高校時代によく聞いた懐かしの音楽を口ずさんでいた。

- Track. 9 「The First Noel」 End. -

幕間

「ふう……極楽、極楽」

銀髪の女、その容貌はこの国では些か不似合いのように思われる。しかし、その顔は頬まで蕩けるような笑みを浮かべていた。いま、彼女の体は暖かい浴槽に肩までつかり、足は惜しみなく満足げに伸ばされている。一般女性よりもはるかに豊満な身体をしている彼女も、見た目とは裏腹に老人のような声を出してしまるのは、場所が場所だからだろう。

ここは大衆浴場、いわゆる銭湯だ。

226.psd

「おばあさんみたい」

先ほどの咳きを耳にしていたのか、金髪の前髪からひつそりと顔をのぞかせている少女が呆れたように眉を顰めていた。

「こういう所ではいいの、いいの」

彼女の指摘を軽い調子で受け流し、リニアは依然として体の奥から絞り出たような声をあげている。

「……やつぱりおばあさん」

見た目との差に、思わずノエルの口から同じ言葉が漏れてしまつた。一方、そんなリニアに味方するように、彼女の隣で同じように満足げな表情を浮かべていた女が口を開いた。

「気持ち良ければ、それで良しよ」

その暢気な口調は、外見の異国情緒な雰囲気を打ち消すかのように、この場に馴染んでいた。

「ふい～」

228.psd

「……こちらもおばあさんみたい」

「そつちは本当におばあさんよ」

ノエルの意見に同調する声。すかさず彼女の首元に腕がかけられた。

「あら、せつかく生きて帰ってきたのに、どうやら死にたいみたいね？」

「ちよつ……先生、嘘嘘冗談ですって」

「言葉に気をつけなさい」

そう言つて天城はリニアの首元を解放した。

そんな彼女たちを見ながら、ノエルは自身の体に目を落とした。リニア・イベリンの体は、大きく突き出た胸に鍛え上げられた腹筋。一方の天城は、リニアほどではないが胸はある。腹筋もそこまで鍛えられていないが、その柔らかそうな肌からは女性らしさが感じられた。

「……なんで私はこんな体なんだ」

不機嫌に頬を膨らませるノエル。彼女は自身でも気づかぬうちに、彼らに嫉妬をしていた

のだ。そんな恨めし気な咳きに気づいたリニアは、

「まだまだこれから、これから。改造人間でもいくらか成長するんじやない？」

他人のことにに関しては明らかにいい加減な返答をする彼女。これが持っている者の余裕と
いうやつか、そう思つたノエルは先ほどよりも体の中がざわついていくのを感じていた。

「あら、ノエルはああいう体になりたいの？」

「まあ……そのほうが今よりは甘く見られない」

まるで近所のおばあさんのような包容力を持つた笑みで、天城はノエルに微笑んだ。ノエルが少し居心地の悪そうな顔で答えると、彼女は当然のような顔で口を開いた。

「うんうん、確かにリニアは美しい体というよりは、強く見えるわね。アマゾンに放り込
まれても、両手の拳だけで切り開いていきそうな位には」

「先生ー、それは誉め言葉ですか？悪口ですか？」

「さあ。どっちでしよう」

ほのぼのとした会話が浴室内に響き渡る。閉店間際の銭湯には、彼女ら一人以外に他の客はいなかつた。つまり貸し切りなのである。そのことが余計に彼女たちをゆるゆるとした雰囲気にさせているのだろう。

「奏、まだ入らないの？」

リニアは彼女の後ろでひとり、未だにシャワーを浴びている背中に声をかけた。

「入る前にちゃんと体、洗わないと」

「偉い、さすがうちの子だわ」

天城は誇らしげに天井を仰いだ。対する、奏は何も反応することなく黙々と体を洗い続ける。そんな奏をじつと見る目がもうひとつ。ノエルだ。

「奏も、いつかあんな体に、なるの？」

あんな体とは、リニアや天城のことだろう。そう思つた奏は、ノエルの質問に答えるよう口を開く。だが視線は彼女に向けることなく、じつと目の前の鏡を見つめていた。

「…………多分」

「タメが長いな!」

思わず顔をあげたノエルだが、すぐに彼女の顔には暗い影が落ちた。

「……じゃあ、私だけがずっとこのままなのか。気に入らない」

「大丈夫。世の中にはいろんな人がいるから、需要はある」

「そんなこと言われても全然うれしくない」

奏の中途半端な励ましに、ノエルは拗ねるように顔を湯舟の中に沈ませた。ぶくぶく、ぶくぶくと泡を立てて、再び目の前の魅力的な身体に視線を戻す。

「うら、ノエル。お風呂の水は飲んじやだめよ」

「いいじやん、どうせ私たちしかいないんだし」

私たち——それは女湯でのことを述べていた。だが、壁一枚隔てた先の男湯にはもう一人の人物がいる。彼女たちの会話が聞こえているのは別として。

「結局、今回も鈴木くんは頑張ったわね」

天城は誰に話しかけるでもなく呟いた。

「そのバカは何もしてないけどね」

天城の賞賛にすかさず毒舌を發揮するノエル。しかし、その矛先は彼女が思つてもみなかつたところに向いてしまつた。

「……私も何もできなかつた」

奏がぽつりと零す。

「……でも何一つ得なことないのに、いつも助けてくれる」

奏の呟きに天城は瞳を閉じたまま、口元に笑みを浮かべた。

「人がいいのか、あるいは只の馬鹿か」

「馬鹿よ、馬鹿」

天城とノエルに好き勝手に評価をされる男。しかし、リニアだけは何故か先ほどからずつと嬉しそうな様子を見せていた。

「ふふふ、さすが私の未来の夫ね。やっぱり優しい人つて必須条件じゃない?」

「夫になる未来は確定されてないけどね」

リニアの一人語りに、一瞬の間も与えず冷静な指摘をした奏は、じとりとリニアの方に首を回していた。彼女からは僅かに黒いオーラのようなものを感じさせる。微かに戸惑いを見せたりニアだつたが、彼女も負けじと応戦した。

「いやいや、聰太が私以外の誰かと結婚する未来なんて想像できないでしょ。というか、私以上に完璧なお嫁さんがいるわけない」

「いる」

「どこに」

奏は何も言わずに立ち上がりつた。そして彼女たちと同じ浴槽に足を踏み入れる。ううつとお湯の熱さに思わず言葉を漏らしたが、それ以上に何も語ることはなかつた。リニアはとも答えなかつた奏に詰め寄つた。まだ話は終わつてないようである。

「それで?どこにいるっていうの?」

「……たぶんいる。まだ時間はあるから」

「なるほど……ね」

リニアの口元は僅かに歪んでいた。

「いつか、スーパー・ダイナマイトボディの女が現れるから」

「それは私よりもすごい女かしら？」

「もつとすごい女」

バチバチと、まるで音が聞こえるかのように視線が絡み合う二人。そんな彼らをノエルは恐る恐る見守っていた。

「お、おい。あれ大丈夫なのか？」

「平気、平気」

天城はノエルに構うことなく銭湯を満喫していた。どうやら彼女にとつては日常茶飯事のようなものになつてているのだろうか。

一方、女湯の騒がしさは当然のように男湯に簡抜けだつた。物音ひとつ立たない男湯にはまるで壁の存在など感じさせないほど、彼女たちの声は身近に聞こえていた。

「どこにいっても、騒がしい連中だな……」

鈴木は呆れた様子で壁に視線を向けた。せつかくの貸し切り気分が台無しである。取れる疲れも取れないといったところだろうか。しかし、彼の気が休まらないのには別の理由があつた。

——完全に出るタイミングを逃した。

今ここで浴槽から上ると隣の女湯に気づかれるのは必至だ。今の今までじつと盗み聞きをしていたと言わても否定できない。だが、このままで絶対にこちら側に声をかけてくるに違いない。そう思つた鈴木は、すぐにでもここから出なければ面倒くさいことになるという考えに至つた。

——よし、出よう。

「そーちゃん! 奏みたいに小さい女の子の体好き?」

「好きになるわけない」

鈴木が出ようとした瞬間、彼が危惧していた状態に陥つてしまつた。声の主はリニアと奏だつた。彼女たちは鈴木の返答に構わず、勝手に会話を続けていく。

「やっぱり私みたいなスーパー・ダイナマイトボディが一番に決まつているわよね」

「……そんなことはない」たぶん

——これは俺が聞いていい内容ではないのではないだろうか。

バンツニ

鈴木が再び男湯から脱出を試みようとした直後、浴槽内に小気味いい調子の音が聞こえてきた。

「いたーい」奏ちゃん暴力反対反則よつて私の勝ちやつぱ小学生の色気なんかより、大

人の色気よね』

バンツニガチャン、ガチャンニ

およそ銭湯では中々聞かないであろう擬音が女湯から聞こえてきた。鈴木は重たいため息をつくと、やつと男湯をあがつた。そして、彼は改めて心に誓いを立てるのだ。

「……やっぱり一人で行くのが一番だな」

鈴木はまたひとつ賢くなつたのである。

幕間 完

239psd